2014年10月13日発行　1969年より通巻345号

The Seinen 特集

二代目日本青年館は、こうして建てられた

－歴史的転換期を迎えて－

2014
No.345

神宮の杜に包まれた都心のオアシス

宿泊

和洋室

洋室

宿泊室８４室（和室４３室・洋室２９室・和洋室１２室）
宿泊380名／会議室１７室（全館ブロードバンド対応）

会議 研修

国際ホール

A-ONE

9F　宿泊室
8F　宿泊室
7F　宿泊室・大浴場
6F　宿泊室・ホテルレストラン
5F　会議室
4F　会議室・宴会場
3F　会議室・国際ホール
2F　大ホール
1F　玄関ロビー・総合案内所・喫茶・レストラン
B1F　会議室・パブ
B2F　中ホール
B3F　駐車場

お問い合わせ・ご予約は

日本青年館 ホテル
03-3401-0101
〒160-0013 東京都新宿区霞ヶ丘町7-1
http://www.nippon-seinenkan.or.jp/ e-mail:hotel@nippon-seinenkan.or.jp

富士山（やま）と落葉松（はやし）と山中湖（みずうみ）・・・

本館

新館

洋室ツイン　洋室トリプル

山中湖畔荘ホテル清渓は、富士山の雄大な麓に位置する山中湖畔にございます。
落葉松林に囲まれた広大な敷地内には充実した施設があります。
豊な自然の中で心も身体もリフレッシュしてください。

宿泊室　６１室／３３０名
＜本館＞　洋室２室・和室２９室
＜新館＞　洋室２８室・和洋室２室
会議室　１０室（本館３室・新館７室）
別　棟　ホール／体育館／大浴場／野外炊飯場

お問い合わせ・ご予約は

0555-62-0020
〒401-0502 山梨県南都留郡山中湖村旭日丘
山中湖畔荘 清渓
http://www.nippon-seinenkan.or.jp/ e-mail:seikei@nippon-seinenkan.or.jp

天ぷら「一心」今秋オープン!

↑体育館　↓大浴場

INDEX

1、前史　日本青年館が生まれるまで
・日本青年館が生まれるまで　3

2、戦後の青年たちと日本青年館
――二代目の新館建設運動と青年団の高揚
・日青協の結成と共同学習の推進　5
・青年団と施設問題　6
・青年会館の現状と問題点　7
・注目された70年代後半の動向　10

3、青年館・青年団を支えた各県の募金活動
・日本青年館再建の足取り　12
　再建論議は10年前から
　21世紀を展望する壮大な構想
　新館建設決定の前後
　オイルショックと計画変更
　旧館のイメージを残す青年の城の完成
　建設資金のあらまし
　新しい青年の城の概要
・各地でのとりくみ　17
座談会 日本青年館建設募金に取り組む地域青年団　18／
関東ブロック会議開催　20／九州ブロック会議開催　22
・募金活動のいろいろ　23

4、青年館（戦前・戦後）の想い出
・田子一民　24・成田久四郎　24・小川憲治　25・栁本嘉昭　25
・水野光四郎　26・全国友の会　26・定通制軟式野球連盟　27
・宝塚歌劇団　27・国際農業者交流協会　28・霞ヶ丘団地　28

5、年　表　青年団と日本青年館の沿革　29

6、日本青年館の歴史的役割と未来
上野景三氏（佐賀大学）　31

7、新たな拠点をめざして
――三代目の日本青年館にむけた経過と構想　35

8、日本青年館役員・職員名簿／各県青年団所在地　36

9、日本青年館・青年団インフォメーション　38

「The Seinen」2014年10月13日発行号　編集／一般財団法人 日本青年館　発行人／小里 貞利　発行／一般財団法人 日本青年館
〒160-0013 東京都新宿区霞ヶ丘町7-1　TEL.03-3475-2570 公益事業部　http://www.nippon-seinenkan.or.jp

二代目日本青年館は、こうして建てられた

―歴史的転換期を迎えて―

大正10（1921）年９月に財団として設立され、大正14年10月に初代建物が完成した日本青年館は、昭和54（1979）年に二代目が建設された。このたび、2020年の東京オリンピック・パラリンピックの開催等に向けた国立競技場の改築に伴い、2015年より移転・建設されることとなった。

大正期、昭和期と二代にわたり青年団の募金運動を中心に建設された日本青年館は、90年の長きにわたり、日本の青年教育や青年運動の拠点として、その歴史をつくってきた。

今回、とりわけ二代目の建物である戦後の日本青年館建設運動を中心に、これまでの貴重な資料をひもときながら、その歩みを振り返り、三代目の日本青年館と青年団の未来につなげていく――

日本青年館が生まれるまで

（昭和50年刊「日本青年館50周年記念」能谷辰治郎より）

大正青年の創造　外苑の空には、淡い黄褐色の質実な近世風の建築物が聳えている。日本青年館である。この館は、大正年間の青年団員の協力によって建ったもので、一片の煉瓦も一枚の硝子も青年団員の汗の結晶にあらざるはなく、財閥からの寄付や官庁からの補助など一切うけなかった。ことごとく青年の自力で築いた「青年の家」である。大正青年の偉大な創造として、当時の社会からは、驚異の目をもって見られたものである。

実は、この偉業にも、大きな背景のあったことを見のがしてはならない。というのは、大正４年以来数年にわたる明治神宮御造営に、全国青年団が労力奉仕をした。それがそのもとをなしているのである。

難問解決への提案　明治神宮御造営は、第一次欧州大戦勃発の翌年からはじまった。そのために、その完成までには、いろいろ予期しない障害が頻発した。特に労力の著しい不足に、御造営当局は深刻に悩んだ。この労力不足を解決するため、しばしば議が重ねられた。そのとき明治神宮造営局総務課長田沢義鋪は、青年団の労力奉仕によって、この難局を解決しようと提案した。もちろん田沢は、この提案をするときにはいま一つの要望をもっていた。それは、明治神宮と全国青年団との精神的結合を、さらに深めたいということで、日本の青年団と神社との関係は、由来密接であったことを、こういう機会に、一層深めたいということであった。

ところが当時の青年団に対する社会的認識はいかにも低調で、明治神宮御造営という国家的事業に、

大正９年　滋賀県蒲生郡青年団

大正10年の霞岳町地図

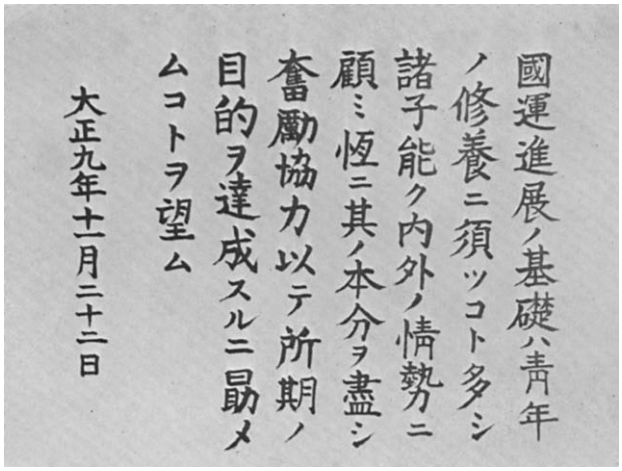
青年団というような、任意団体の奉仕などどうかという疑いを抱く人々も多かった。田沢は郡長当時に、青年団に身を挺して、青年団の実力の程に確信をもっていた。その確信に支えられて一つの信念にさえなっていた。

「青年団の実力を疑っていられる方も多いようだが、その真価を知るために、試みに、２、３団体に奉仕させてみて、その結果をみて結論を出してはどうか」と提案した。幸いにこの提案が容れられた。そこで田沢は、かつて郡長時代に指導した静岡県安倍郡有度村（現在静岡市に編入）の青年50人を呼んで奉仕に当たらせた。ところが、その成績は素晴らしかった。１人で２、３人分の能率をあげた。さらに安倍郡から２団体を呼んで奉仕させた。これまた前績とかわらない。青年が感激をもって実践すると、おどろくべき力を発揮する。先きにあやぶんでいた人々も、すっかり感服した。問題はこうして解決し、これを全国的規模にまで拡大し、明治神宮御造営全国青年団労力奉仕が展開されることになった。

令旨の奉戴

これが、御鎮座祭直後、内務（床竹竹二郎）文部（中橋徳五郎）両省が発起して、全国青年団明治神宮代表者大会を開く契機をつくった。この大会には都市を中心にして代表者649名、引率者48名、計697名が参加し、東京築地の本願寺を会場にした。この大会は会期一週間であったが、大会後２日目、すなわち大正９年11月２日に、皇太子殿下には、代表を高輪御所に召され謁を賜わり、さらに別掲の令旨を賜わった。

令旨を奉戴した代表たちは、いたく感激して、この令旨に奉答すべく、何か大正時代の青年の意気を


國運進展ノ基礎ハ青年
ノ修養ニ須ツコト多シ
諸子能ク内外ノ情勢ニ
顧ミ恆ニ其ノ本分ヲ盡シ
奮勵協力以テ所期ノ
目的ヲ達成スルニ勗メ
ムコトヲ望ム
大正九年十一月二十二日

皇太子殿下より下賜された令旨と銀製花器

後世にのこしたいと提案した。

ある人は、令旨を刻した石籠籠一対を明治神宮に奉献してはと提案したが、大正青年の感激を記念する事業としては何かもっと意義あるものでありたいとのことで、この案はとりあげられなかった。そして明治神宮のそば近くに、青年の修養道場が欲しいという声がおこった。そのとき内務大臣床次竹二郎は、もし、青年館の建設が青年自身の発起によって、自主的に実現するならば、内務文部両大臣の職にあるものは、その産婆役になることをあえて辞さないと言われた。青年たちは自主的に青年の手による日本青年館の建設を深く決意した。

かくして、各府県の青年団が、日本青年館の建設資金を得るために、青年の勤労と節約によること申し合わせ、植林作業や、土木作業、縄ない、炭俵編みなどから、映画、芝居、角力などの娯楽方面にまで手をのばし、禁酒、禁煙を励行、被服費などの節約につとめた。こうした熱と汗とによる零細な資金は、ついに日本青年館建設の巨費をつくるに至った。日本青年館の建設こそは、全日本青年の団結の力の偉大さを示したものと言うべく、内外古今にその類例を見ないものである。

開館の日

日本青年館が完成して開館式を挙げたのは大正14年10月であった。大正11年12月８日起工して、数年の年月を要した。その規模、その設備、その調度など、当時の東京市内の大建築物に比し遜色がなかった。式当日には、時の総理大臣加藤高明をはじめ、各省大臣、外国使臣、その他朝野の名士、それに地方青年団代表とその関係者など会場にあふれ、まことに絢爛、盛大な会であった。

主な記念行事は（１）青少年資料展覧会、（２）青年の意見発表と記念講演、（３）由緒ある郷土舞踊と民謡の３つを中心に青年の意気を盛りあげることにした。

なお、このとき催した郷土舞踊と民謡は、参列の人々に、予想を超えた感銘を与え、こうした会を、毎年開いて欲しいという要望が、誰からともなくおこり、今日なお、文化庁と共同主催で、これを続けていることは御承知のとおりである。

日本青年館は、およそ以上のような経緯で建ったのであるが、開館当時、金10万円、御内帑金御下賜の光栄に浴した。さらに大正15年４月13日、第２回大日本連合青年団大会に、はじめて皇太子殿下をお迎えすることができた。しかもこのとき御紋章入り銀製大花盛器を下賜、まったく重なる光栄に感銘を新たにした。

昭和９年　第八回郷土舞踊と民謡の会

大正15年当時の日本青年館と外苑風景

日青協の結成と共同学習の推進

（昭和54年刊「青年３月号」より）

昭和26年に日本青年団協議会（日青協）が発足した、日青協と青年館は表裏一体の協力関係を保ちながら、公明選挙運動、産業開発青年運動、沖縄返還運動、日中国交回復運動、北方領土返還など、多彩な活動を積極的に推進してきた。講和条約の発効を記念して「講和記念全国青年大会」が発足し、本年（平成26年）は第63回を迎えるに至った。

とりわけ日青協と青年館が協力して生み出した傑作は「共同学習」であろう。

昭和42年　沖縄返還運動　那覇港にて

昭和31年　日青協の第一回中国訪問代表団

『共同学習』は昭和28年ごろ日青協が組織をあげて取り組んだ青年学級振興法反対運動を直接のキッカケとしてその第一歩をふみだした。つまり地域で自主的に行なわれていた青年学級や夜学会に国庫補助の途を開こうとした『青年学級振興法』に対し、わずかな補助金とひきかえに青年の自由な学習の場が失なわれ、働く青年の教育に官僚統制が強まることを危惧し、学習に青年の自主性・主体性を貫きとおすために法制化反対にふみきったのである。

青年学級振興法は国会を通過し、28年８月に公布されるが、青年団と青年館は協力して青年の立場から望ましい教育のあり方を展望した。「勤労青年教育基本要綱」と、これを下敷にした共同学習を創り出し、全国的な運動を展開、その集約の場として昭和30年に「青年問題研究集会」を開いた。青研活動は青年団運動のバックボーンとして大きな広まりをみせ、平成26年で第60回を積み重ねることとなった。

青年の自主性に基調をおき、理論と実践を両輪として組みたてられた共同学習論は、かつての青年団講習所の理念を現代に開花させた青年団運動の方法論であり、日本青年館の建館の精神を新たな手法で結実させた一つの所産でもある。

青年団と施設問題

（平成13年刊「地域青年運動50年史」第９章　長澤成次より）

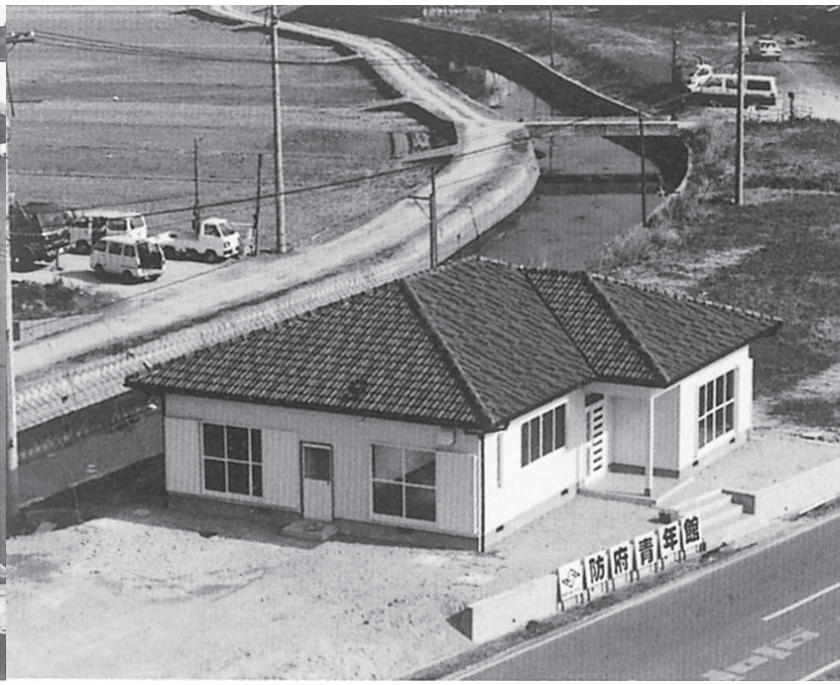
青年団活動の拠点としてまた青年学級の開設場所として公民館は大きな役割を果たしてきたが、一方で青年団固有の施設要求も歴史的に展開されてきた。特に1970年代前半から80年代前半にかけて以下にみるように建設運動が大きく展開されるが、これは日本青年館再建募金運動や日青協による学習論（共同学習の見直しやたまり場の重視）が青年の施設要求を掘り起こす契機になっていったと思われる。また、1972（昭和47）年の第17回全国青研で特別分科会「青年会館建設と運営の問題」が開催されているように道府県レベルでの青年会館建設運動も市町村レベルの建設運動に影響を与えたと思われる。

青年団の施設要求は、（１）公共施設建設要求運動として組まれる場合、（２）団員の自宅等も含めて自前の施設として建設する場合、（３）行政から何等かの援助を受けて建設する場合、（４）既存の（社会教育）施設に対する改善要求　の四つに大きく分けることができよう。また、その現れ方は当然、地域の状況によって異なる。

以下、全国青研における施設問題を取りあげたレポートから動向をみてみよう。

1950年代には、早くも山梨県牧丘町「青年会館建設」（1957年）や岐阜県羽島市「青年会館」（1958年）で見られ、また1964（昭和39）年から展開された石川県加賀市「青年の家設立運動」、長野県松本市「松本市青年会館建設運動」・島根県横田町「青年館建設運動」・長崎県「青年館」・鈴木県「青年館」（1972年）、長野県飯田市「青年の家」（1973年）、大分県竹田市「青年会館建設輸動」（1974年）、富山県立山町「青年の家」建設運動・千葉県鋸南町「青年の家」（1975年）、新潟県糸魚川市「青年団の家確保」、立山町青年の家建設運動「青年団の家」（1978年）、島根県伯太町青年の家（1979年）山形県高畠町「青年館」（1982年）、福島県高郷村「会館建設」（1986年）など、各地で青年施設建設運動が取り組まれた。

昭和63年　福井県武生市青年館



昭和63年　山口県防府市の青年館

昭和60年

青年会館の現状と問題点

―道府県青年会館の場合―

（昭和60年刊「青年会館の現状と問題点」富田昌宏より）

昭和25年　法人の会館として最初に設立された佐賀県青年会館

戦後のあゆみと現状

青年会館に類する施設は戦前から各地で利用されていた。例えば防長青年館は昭和12年に建設され最近まで山口県下の青年の館としての役割を果たしてきた。しかし戦後、都道府県単位の青年会館建設が本格化したのは昭和25年に完成した佐賀県青年会館が端緒であった。この会館づくりは「地域青年団が勤労青少年の自治的集団としての名与（ママ）を保持し、その機能を発揮するためにはしっかりした拠点が必要である」との考え方に立ち、青年団の事務所や宿泊、会議の諸設備を整え、専任の事務職員が配置され、さらに会館の収入による青年団への財政援助に期待がもたれた。この基本はその後相ついで建てられた各県の会館でも同じであった。

昭和26年１月、青年団の全国組織（日本青年団協議会）結成のための大会が佐賀で開かれた。ここに集まった各県青年団の代表は新装となった青年会館の偉容と充実した事務局体制に驚嘆、これが大きな刺戟となり全国的な会館づくりの糸口となった。

以後昭和34年までの十年間、つまり青年団の興隆期に、福井、北海道、宮城、山形、奈良、愛知などで会館建設（一部には既設の建物を買いとるなど）が行われ、青年団の発展の足がかりとなったのである。これが第一期である。

35年から47年までは、高度成長期で、青年団にとっては急速な低迷の時期であった。この間に宮崎、滋賀、秋田などに新館がオープンした。宮崎は県民一億円貯蓄運動を展開しその利子を寄付してもらう方法で運動をすすめ、滋賀は団員によるラーメン販売の益余（ママ）を資金に、秋田は団員一人千円募金を主体にと、それぞれユニークな方法で会館づくりがすすめられた。これら各県の共通点は青年団現役の団結と行動力、OB の支援体制であり、その中核メンバーは現在もつづいているのがその特長である。この期間はいわば第二期ともいうべきもので、飛躍的発展をとげる第三期の導火線となった。

第三期は48年の石油ショック以降現在まで。お金やモノ万能から人間性尊重の気運が徐々に高まり、青年団のよさが再評価されるようになった時期で、この間の新増築は日本青年館を含め20館に及ぶ。こうした飛躍的増加の根底には、青年団再建への必死の願いがあった。と同時に、日本青年館分館の建設で突破口を開いた船舶・自転車振興会等の補助金の導入が大きな支えの一つになったことも見逃すことはできない。

ちなみに戦後の会館建設の概況とその規模は別表のとおりである。この他に島根、鹿児島等にも木造の会館があり現在も活用されており、福島では青年団が建てた会館（別表）の他に、県立の青年会館がある。

栃木県青年会館「コンセーレ」

また、現在会館建設に取り組んでいる県は59年度着工の沖縄、61年度完成を目指す高知をはじめ、山形、岡山、島根などがあり、さらに数県で組織的な協議がすすんでいる。大勢としては全県設置の方向に大きく歩んでいるといえるであろう。

運営の方式は大半が財団法人化しており、青森、福島が任意組織となっている。

つぎに建設運動や資金づくりの状況をみるといずれも青年団が自分たちの館をつくろうと決意し募金運動を開始していることから特徴である。募金の方法はそれぞれ特色をもっているが凡ね次のようなものである。

団員募金、物品販売、映画会収入、ミュージカル上演、廃品回収、公用地の草刈り、電話帳配布など。

さらに最近では他の青年団体への協力を要請したりOBに働きかけたり戸別訪問による全地域からのカンパなどが目立つ。この運動はさらに自転車・船舶振興会への補助金要請、県当局や市町村への協力依頼、さらには企業募金へと発展し、建設資金づくりが行われ、どうしても不足の場は一部を銀行や年金福祉事業団からの借り入れで補てんしているところもある。

ただ最近気がかりなことの一つに、県立民営方式――つまり、青少年団体の募金は財団法人の基本金に積み立て、建設費を全額府県が支出するところがみられることである。このことは青年会館の自主的運営という基本原則とどのようにかかわるのか、今後の重要な検討課題であろう。このことに関し、宮城県青年会館の建設時のいきさつを回顧し、会館の

別表　青年会館一覧

No.	名　称	竣工年月	増改築(昭和)	階　数	延面積 m²	宿泊人員
1	日本青年館	大正14年	54年新築	地下３　地上９	24,401	500
2	日本青年館（分館）	昭和８年	49年新築	地上３	4,682	1200
3	佐賀県青年会館	昭和25年	49年新築	地上５	2,221	128
4	北海道青年会館	昭和27年木造買収	30年新築　49年新築 現	地下１　地上５	1,881	200
5	福井県婦人青年会館	昭和28年	39年新築　49年増築	地上４	855	50
6	宮城県青年館	昭和30年	52年新築	地下１　地上４	2,308	60
7	奈良県青少年会館	昭和32年	47年新築	地上２		62
8	愛知県青年会館	昭和34年	39、44、49年 増築	地下１　地上５	4,468	120
9	宮崎県青年会館	昭和38年		地上２	836	70
10	滋賀県青年会館	昭和42年	53年増築	地上３	2,288	130
11	鹿児島県青年会館	昭和43年		地上２	195.43	40
12	秋田県青年会館	昭和45年	新築	地上２		60
13	福島青年会館		49年新築	地上２	688	50
14	栃木県青年会館	昭和50年	56年増築		5,943	170
15	京都府青年会館	昭和50年		地上４	2,663	85
16	和歌山県青年会館	昭和50年		地上３	1,191	70
17	長崎県青年会館	昭和50年		地下１　地上４	1,626	94
18	大分青少年会館	昭和51年		地上４	2,155	102
19	岩手県青少年会館	昭和53年		地上３	2,286	152
20	石川県青年会館	昭和53年	54年増築	地上４	4,288	200
21	静岡県青少年会館	昭和54年		地上３	1,835	0
22	茨城県立青少年会館	昭和55年		地上４		100
23	青森県青少年会館	昭和56年		地上３	1,123	62
24	群馬県青少年会館	昭和57年		地上３	2,736	85
25	防長青年館（山口）	昭和58年		地上４	3,032	67
26	熊本県青年会館	昭和58年		地上４	1,786	80
27	沖縄県青年館	昭和60年		地下１　地上５	2,666.49	54
28	島根青少年会館	昭和62年		地上１	583.36	50
29	岡山県青年会館	昭和63年		地上３	1,493.83	52
30	高知県青年会館	昭和63年		地上２	1,245.84	100

昭和60年『青年会館の現状と問題点』　別表は、昭和63年までの設立会館も加えて作成
（補記）上記表以降から2014年10月現在までに閉館した会館は、奈良県・宮崎県・京都府・長崎県・大分県・石川県・青森県
（その他、福井県の上記青年館は取り壊されたが、現在、県の職員会館を青年会館として管理運営している）

基本的性格とのかかわりを明確に指摘した内海事務局長の発言を引用してみたい。

会館の性格づけと青年教育

宮城県では青年会館建設の補助金陳状に対し、知事は理解を示して、〈知事としては青年が大型の施設を独力で運営するのは重荷であろうとの親心から、中野のサンプラザ方式、県生涯教育会館の一部に含める案、さらには青年会館を全額県費でという構想まで出された。しかし、青年はこの何れの案にも賛意を表せず、例え規模は小さくとも、その運営に困難があろうとも自から運営できる独立施設を望んだ。

これは会館の基本的性格を決定づける重大な岐路であった。

大人には青年が苦労して税金のかかる施設をもち、また経営的に危惧を感ずる教育事業に責任をもたなくてもよいのではないかという見方が多い。県議のなかにもこの意見があり、青年のなかにもその方が合理的だとする考え方もあった。

しかし、公的な施設が如何に青年の要求に応え、その内容に配慮しても青年には不満が残る。青年は外部からの発想や枠付けされたもの、特にそれが権力をもって行なわれた場合は、事の善悪にかかわらず抵抗を感ずるものである。これは個の自覚の高まった青年の心理的特性である。青年の家や勤労青

少年ホーム等の公的施設が増加しつつあるにもかかわらず、なおも青年会館が強く求められる理由はここにある。

今の青少年教育を見ると、青少年の自主性を強調する一方で、青年が自からの頭で考え自からの力でやるべきことまで行政や施設が手を貸しているケースが多い。モラトリアム人間の生れる一因ともなっている。

したがって〝青年による青年のための運営〟が青年会館の基本的理念であるならば、できるだけ外部からの統制と監督を排し、青年や青年団体が自からの創意と責任において運営するのが青年会館のもつ特性であると思う〉

内海先生のこの指摘はまさに核心をついたもので、この性格づけは青年会館論の骨格をなすものであると思う。

昭和60年に竣工した沖縄県青年会館

注目された70年代後半の動向

（平成13年刊「地域青年運動50年史」21世紀の地域青年運動をすすめるために　千野陽一より）

この間、地域青年運動がすべて順調に展開されていったわけではない。1960年代から、農業・農村から土地・水、労働力を奪い取る形で急ピッチですすめられる財界筋本位の工業優先の高度経済成長政策は、地域青年の存在形態を農業青年から出稼ぎ青年、在村通勤青年に変え、地域の青年の孤立化・分散化を加速させていく。こうして、1960年代から70年代前半にかけて、今までの農業青年主体の青年団が崩され始め、団員数の減少を伴いながら、在村通勤青年が多数派となった青年団が数を増してくる。その中で、団員間の興味関心の多様化が進行し、まとまりも欠き、青年団が解散に追いこまれる地域も増大してくる。

このような困難に遭遇しながらも、1970年代後半になると、地域青年団にいわゆる「第二の高揚期」が訪れる。その背景は何か。

一つには、旧全総・新全総という線で「上から」財界筋の論理によって地域にすきこまれてきた高度経済成長政策が、物的豊かさをもたらしはしたものの、過密・過疎、公害の激化を伴わせながらとめどもない地域破壊・生活破壊を招き寄せ、表向きのこととはいえ、国もまた、地方の自主性を尊重せざるをえなくなる。日青協は、この間の動向を敏感に捉え、1980年代の初めに政府筋が掲げた「地方の時代」に対置して「地域の時代」、外からの開発に対置して「内発的発展」を提唱している。いいかえれば、青年をも包み込んだ地域住民の暮らしの安定と発展には、地域に住む人々のものの考え方、感じ方、内からの要求を基本軸にしなければならないという主張の確認と、その実現に対する努力展開の強調である。この地域づくりの基本線は、先回りしていえば、1990年代には「ふるさとクリエイティブプラン」づくりという形で、成否は別にしても、さらにそのふくらみを増していく。

二つには、いわゆる「新館建設運動」に結集した道府県団・市町村団の凝集力と、それを引き出した日青協の指導性といえる。そこには、おのずから団活性化のエネルギーが湧きだしてきている。と同時に、新館建設運動に道府県団の会館建設運動が輻輳しあうことによって、そのエネルギーは倍加したに違いない。

三つには、運動・活動の基底には必ず学習活動があるが、この時期、かつての共同学習運動に学びながら、「たまり場学習」「現代若者宿」づくりなどと呼ばれた、本音・弱音のかわしあいを機軸にした密度の濃い話し合い学習がそれなりに展開され始めたことは、しばしば指摘されている事実であった。その際、1976（昭和51）年刊の『青年団論』（那須野隆一）も、その優れた励ましとなった。この学習は、道府県によっては、「生い立ち学習」「生活記録学習」などへと発展する。しかし、それらが、必ずしも長続きしなかったことが惜しまれるとともに、その理由の今日的な解明が求められている。

また、1975（昭和50）年の国際婦人年とそれに続く「国連婦人の10年」が、女子青年の活動に新たな地平を用意することによって、女子青年の持ち前の力を引き出し、「第二の高揚期」を準備した事実も忘れられてはならない。

昭和53年刊

昭和51年刊

前進・後退の交錯の中で

しかし、1980年代の一定の時期から、地域青年運動は停滞期を迎えざるを得なくなる。新館建設に大きなエネルギーが発揮されたものの、完成後さらにそのエネルギーを持続するのは容易ではなかった。それに、四全総が大都市一極集中を一層激化させ、

昭和54年刊

昭和53年刊

地域から青年を奪い去る傾向を一層顕著にし、団員数を減らしただけでなく、高学歴化の目に見えた進行とそれに伴う進学競争の激化が、地域に住む青年前期の世代の目を地域から引き離し、離村傾向に拍車をかけ、近い将来における団員数確保の可能性を著しく小さくしていく。80年代初期から胎動し、急速に本格化する臨調「行革」路線がらみで青年団に対する公的支援の目減りも次第に顕在化し、組織化に一定の影響を及ぼしてくる。

また、この時期、ポスト新館建設運動としてすすめられた組織強化・団員倍増運動も、当時の変化する青年の要求に深く根ざしていくという点で一定の弱さが見られ、結果として、その画一的な進め方の空転という事実から自由ではありえなかった。

当時流行した青年論を象徴的に表現した「新人類」「異星人」「まじめさの崩壊」などなどは、どれほど青年の内面の葛藤にまで深く立ち入って、その思いを正確に捉えあげていたものだっただろうか。言い過ぎを許されるならば、それらはふくらみを増しに増した管理社会・競争社会のもとでまっとうな自己表現を許されなくなった青年たちの表層的な発言・行動を、管理する側から焦燥感をない混ぜにしながら捉えたものであった。前後するが、日青協は1987（昭和62）年に『地域青年白書―若者たちの自画像』を関係統計資料の分析のみならず直接面接による個々の青年の内面に立ち入る形でまとめあげている。この『地域青年白書』は、当時の青年の潜在的要求を可能な限り明らかにし、「若者たちの自画像」を先にふれたマスコミ好みの青年論に対置したが、その成果が、組織強化活動に十分生かされなかったことも反省される。

また、この時期、活動家養成の画期的な長期研修の場として、四泊五日の「清渓塾」が開設されている。「清渓塾」は、国内外の情勢や青年団論に関する体系的講義と小集団による徹底的な話し合い（学習セミナー）の二つを構造化した学習の場であった。しかし、次第に前者が形骸化し、後者の学習セミナーに力点が移っていったが、そこでは、外界と隔離された自己という小宇宙や青年団の枠内での精神論的な生き方の追求が話題になりやすく、世界、日本、地域、青年の生活を構造的に結びつけて考えるという学習力が抜け落ちがちで、中断のやむなきにいたっている。

一方、1980年代には、国際青年年（IYY、85年）を機に、日青協が『国際青年の年「日青協宣言」』を発表し、その中で「地域づくりと参加」「真の男女平等の実現」「相互不戦・平和の実現」などともに、有給教育休暇制度と18歳選挙権の実現などをあらためて押し出していて、注目される。また、この年代は、日青協が男女雇用機会均等法制定に関する対政府要求を強めたりするなど、多彩な社会活動を豊かに展開する画期的な時期でもあった。

にもかかわらず、総じていえば、1980年代は、既述のような地域破壊や管理社会化の一層の深化とともに、組織弱体化の目に見えた進みという厳しい現実に直面せざるを得なかった時期であった。

昭和56年刊

平成８年５月制定

日本青年館再建の足取り

（昭和54年刊「青年３月号」より）

昭和44年　寝タバコから５階を焼失した日本青年館

再建論議は10年前から

歴史的な遺産を取りこわし、新らしい物を生み出すということは、並大抵のことではない。現在、日本青年館は立派に再建されたが、その裏面には、数多くの試練が秘められている。

日本青年館の新館は一朝一夕にして誕生したのではなく、実に10余年の歳月を要した。再建の話は昭和42年から始った。

大正14年に建設された旧館は、関東大震災の時に基礎工事をやり直しただけあって、基盤はしっかりしたものだった。戦中、戦後の混乱期にも耐え抜いてきたが、昭和30年代に入ると寄る年並みには勝てず、老朽化が目立ってきた。年々補修費はかさみ、財団の運営を徐々に圧迫した。昭和40年代に入ると、年間２千～３千万円の補修費がかかるようになり、ついに赤字経営に追い込まれた。施設内部の痛みはひどく、毎年の補修も焼け石に水の感さえあった。

昭和43年の理事会ではこの状況を深刻に受け止め、９月には施設研究委員会を設置した。この委員会は、館の施設状況を調査するとともに、経営の状態を総点検することにあった。

研究委員会は１年がかりで作業を急いだが、昭和44年の１月、ホテル宿泊客の不始末で、５階の一部を焼失するという不慮の災難に遭遇した。委員会の作業は一時中断するとともに、より深刻になった状況をふまえて、同年の７月に答申が出された。

東京オリンピックのプレスセンターとして活躍した日本青年館

21世紀を展望する壮大な構想

施設研究委員会の答申は、館の赤字財政を克服するための当面の改革案を提示するとともに、長期展望として、国際青年会館の分館を建設すべしとする壮大なものだった。背景には館の施設状況は、もはや限界にきているという結論があった。

この答申は、理事会においても賛同を得たが、国際青年会館の長期構想は、土地問題も含め、具体的な面になると論議をゆきづまらせてしまいがちだった。「施設の限界は分館建設まで待てないのではないか」という不安を払拭することはできなかった。火災を契機として、関係者の危機感は高まり、ジリ貧からどう脱出するかという切実な問題をふまえた具体案の作成が求められていた。

翌45年５月、館の理事会において小尾理事長は国際青年会館建設の試案を提案した。それは、万国博覧会の利益金を導入し、旧館をとりこわして、そこに新館を建設するという内容のものだった。この提案は議論を呼び、「青年団との関係はどうなるのか」「寄付行為を変えるのか」といった現実論がかわされた。

当時においては、旧館をとりこわすという大胆な理事長試案は、大きな反響を呼んだが、同時に本格的な再建論議の火付け役となった。

翌46年の評議員会において、館建設構想特別委員会が設置され、過去の経過を洗い直し、理事長試案を土台として建設構想を練り上げていった。そして１年後の47年５月､特別委員会の答申が公にされた。

新館建設決定の前後

特別委員会の答申は「現在の施設を改修して長期維持（約20年間）をはかるには、約13億円を必要とする。この際、新館建設に踏み切るべきである」という内容。同時に財団の性格についても論議され、基本的には財団の歴史的な役割を変える必要はないと結論づけていた。つまり、青年団との関係は従来同様に堅持し、地域青年団の殿堂として再建すること、青少年団体の活動にもサービスできる施設とすることなどが盛り込まれていた。

この答申をめぐって議論は熱を帯びた。主として青年団サイドからの意見は、新館の対社会的な窓口が拡がることによって、青年団との関係が希薄化するのではないか、といった不安。一方、旧館建設当時の古い関係者からは、歴史ある旧館をどうしても解体しなければやっていけないのか、といった不満の声が当然のこととして起ってきた。

このように現実味を帯びてきた真剣な議論は、逆に再建の気運をいやが上でも高めた。48年１月の理事会では、新館建設委員会を正式に決定。再建を前提とする本格的な準備体制に入るに至った。

建設委員会には、用地問題、施設の機能問題、資金対策問題などそれぞれ検討する三つの小委員会を設け、館の全理事、並びに日青協執行部の全員が加わって構成された。用地問題は、現有地が国有地で国と賃貸借している関係から、これを無償、ないしは低額で払い下げを受けられないものか折衝を行なったが、結局は有償で約７億円という数字が提示された。金利計算などをすると、むしろ従来同様の賃貸の方が得策であるという結論を出した。

機能委員会の方は、青少年活動の将来への展望をも含めて、新館の施設内容を議論した。原則的には、従来通りの宿泊研修型を基本とし、新たに国際青年会議場を設けること、公益的な機能においては、青少年問題の調査研究、社会教育資料センターの新設、国際交流世話機構の確立などが答申のなかに盛り込まれた。

資金対策委員会では、資金計画をどうするか、とりわけ文部省をはじめとする補助金の導入、青年団および財界募金の見通し、そして借入金の限度額など、完成後の運営試算をはじき出しながら方針をまとめていった。

かくして作業は急ピッチで進められ、48年８月の理事会において、ついに55億円の建設予算が決定され、評議員会の承認もとりつけて再建準備はいよいよ本格化していった。

オイルショックと計画変更

財団の方針決定に呼応して、日本青年団協議会の方でも新館建設特別委員会を設置、募金計画の論議に入った。オリンピックのときの改修や火災の募金とは異なり額が大きいことと、組織の力量が問われるだけに、意見の統一は容易ではなかった。

49年の５月、定期大会において白熱の討論ののち、再建運動のとりくみを決定。着工を50年４月として募金運動を展開することとなった。大正時代のときと同じように、全国の青年団が決起するかどうかが、対外的な折衝のカギとなっていただけに、大会決定は意義深いものだった。

しかし、当時の日本経済は、オイルショックの影響をもろにかぶり、社会混乱に陥っていた。物価上昇は著しく、とりわけ資材関係の値上りは激しくなっていた。建設費なども大幅に急増していた。建設予算55億円を決定してからわずか１年もたっていなかったが、49年８月の理事会では75億円に変更せざるをえなかった。政府自体も予測できなかった経済的混乱だっただけに、この変更はやむをえないものがあった。

一方新館建設の決め手となるのは、青年団の募金運動とともに、政府の援助が受けられるかどうかにかかっていた。時間をかけた文部省折衝の結果、49年度予算で調査費100万円をつけることができた。どのような施設内容とするか、機能委員会のまとめを土台とし、外部の専門家も入った調査委員会においてさらに検討を深めた。

この調査報告に基づき、50年度予算で文部省の建設補助を期待したが、再度調査費（200万円）となり、着工を１年延期せざるをえなかった。２年目の調査は、基本設計をもとに、全国の優れた施設を実地調査しながら専門的なメスを入れたものとなった。これはのちの実施設計の段階で大変参考となった。

丸１年の計画変更は、すでに旧館の営業をストッ

プしていただけに、大きな打撃ではあったが、結果論としていま考えると、むしろよかった。その理由は、１年の間にオイルショックは鎮静化し、逆に国際収支の大幅な黒字が、国内産業に不況風をもたらし、建築単価などが急速にダウンした。その結果、建設予算は再び当初予算でいけるという見通しが立ち、工事を安く上げるという点では、時期的にはむしろ好都合であった。

文部省補助は、51年度予算において、ついに建設補助として１億円を確保することができた。このことは、日本自転車振興会、日本船舶振興会の補助金を導入する大きなきっかけとなった。また、青年団の募金活動にもさらに拍車をかける力となった。

旧館のイメージを残す青年の城の完成

52年２月７日、ついに旧館の解体工事に着手した。取りこわしの式典では、旧い関係者、青年団の現役の幹部など、多数の参加者が見守るなかで、後藤文夫会長が大ホール玄関口の古い看板を静かに降ろした。その瞬間は、まさに万感胸に迫るものがあり、古いOBの方々がそっと手をふれる光景は印象的だった。

４月４日、常陸宮殿下をお迎えして起工式を盛大に行ない、いよいよ本格的な建設工事に入った。なお、設計は安井、佐藤両設計事務所が当たり、施工はフジタ工業が行なった。工事には丸２年かかったが、旧館建設時の関東大震災のような災難もなく、

無事にすすめられた。

54年１月31日、日本青年館の新館は無事完成し、翌２月１日には常陸宮殿下を再度お招きして、待望の竣工式典を盛大に行なうことができた。

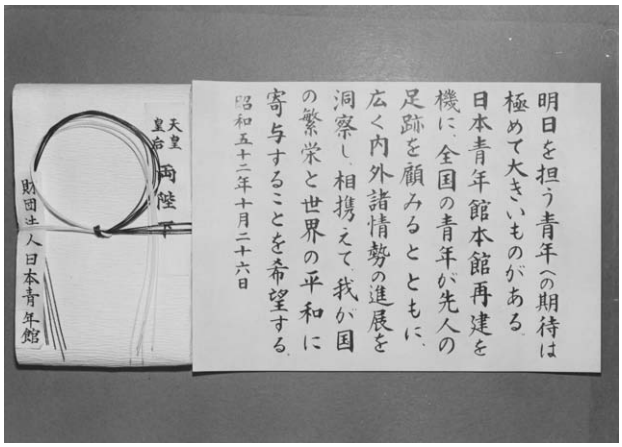
新しい日本青年館は、ちょうど旧館に倍する建物となり、神宮外苑の緑の中にそびえ立つ、旧館の50余年の歴史と伝統を継承し、21世紀の歴史に向かってはばたく勇姿は、再び全国青年団のメッカとなるだろう。

いま、苦節10年の歳月を振り返るとき、いろいろな苦労が想起されるが、そのようななかで、関係者一同を非常に感激させたことは52年10月26日の旧館の開館記念日のことである。

天皇陛下は、日本青年館再建のことをお聞きになり、開館52周年記念日に、財団法人日本青年館に対してお言葉を賜わった。また、天皇、皇后両陛下より事業ご奨励のお思召しをもって金一封を賜わっ

大ホールの新しい緞帳
「富士山」と「桜」

た。このことは旧館建設当時の歴史をよみがえらせるものであった。



以上のように、日本青年館建設の道程は、決して平坦なものではなかったが、ともかく多くの関係者の協力のもとに見事に完成した。しかし建設事業すべてが完了したわけではなかった。建設資金の中で重要な部分を占める青年団募金、中央財界募金は、まだ完遂しておらず、募金運動の完了を待ってはじめて建設事業は終わるのだ。

建設資金のあらまし

建設事業においては、その資金計画がもっとも苦労するところです。特に民間企業とは異なり、財団の場合は、資金のほとんどを外部資金に依存しなければ建設できるものではない。

建設資金をどの程度集めうるか、それによってどの程度の建築規模が可能なのか、収支のバランスを確定させることは極めてむずかしい仕事だ。現在まだ予定している資金を集めきっていないので、詳細な資金計画を明らかにすることは避けるが、そのあらましは次の通り。

まず、文部省を始めとする外部資金関係では国庫補助６億、日本自転車振興会、船舶振興会補助を各４億円、それに自己資金６億円をまず確定財源とした。それに法人募金４億円、青年団募金５億円、計29億円となる。これに完成後の支払能力を計算の上で、年金福祉事業団から25億円の借入れを行なうこととした。これらの合計額は54億円。日本青年館の新館建設は、この限度で実施することを建設委員会でまず確認することから始った。

一定の限度内で、よりよい施設の完成を目指すので苦労も多い。建築には主体工事以外に、電気、ガスの引込料とか、建築承諾料、什器備品などがかかってくる。これらもひっくるめての54億程度に収めなければならない。幸い関係者の理解もあって値引きなどしてもらい、ともかく、ワク内で収めることができた。

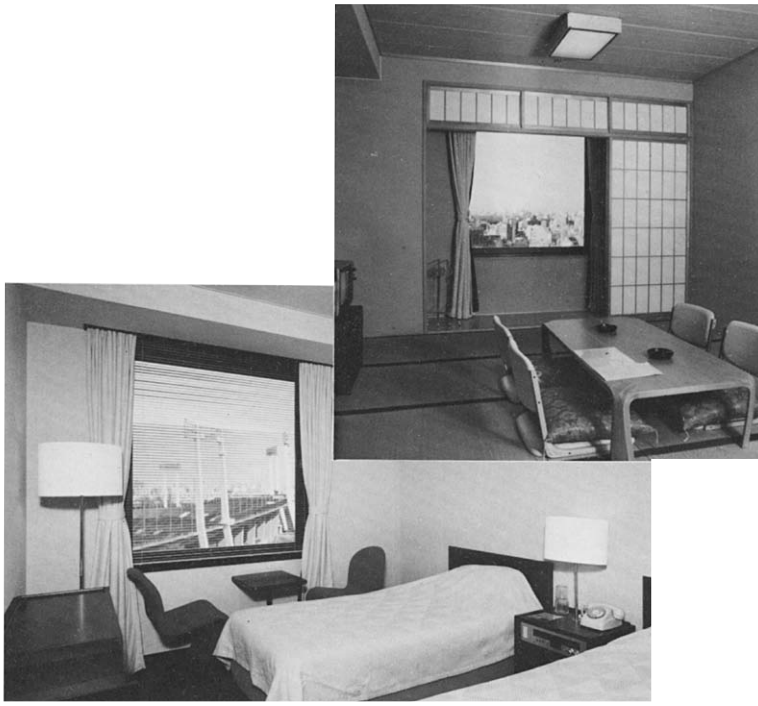
しかし、残されている問題は、前にもふれたように、不確定要素の強い募金が未達成であること。現在なお、全力をあげて取り組んでいる。不況できびしい法人募金の減額部分をカバーするため、全国知事会の協力を求めた結果、各自治体の協力を受けることもできた。

このように、資金確保の面では若干の問題を残してはいるが、関係各方面の大変な善意と協力とによって、日本青年館の世紀の大事業は、見事に実を結んだ。

新しい青年の城の概要

新しい日本青年館の施設規模は、旧館の丁度２倍の大きさだ。延面積は24,401㎡、地上９階、地下３階建てである。地下２階、３階は機械室と駐車場で占め、車は42台収容。地下１階は300名収容の中ホールと、喫茶・食事、理髪、歯科医院、喫茶バー、売店などのサービス店舗が並んでいる。

１階はピロティと玄関ロビー、２階は青年館および日青協の役員室、事務局関係、３階は国際会議場と大小会議室、４階は結婚式場部門、５階は青少年団体事務局、図書室、青年団ルーム、６階～９階が宿泊施設となっており、700名が収容。そして南西に面する片側半分の１階から５階にかけては、1,400



名の大ホールがあり、その上に宿泊用の大食堂が作られている。

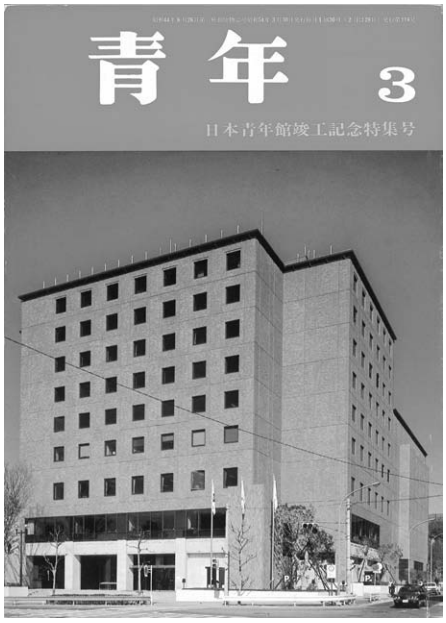
わかり易く断面図にすると次の通りとなる。

施設の特長は、まずホール部門では、大ホールの舞台を広くとり、回り舞台、大迫り小迫りを設備したこと。照明、音響も現代最高水準の立派なものを取り付け、都内でも有数の大ホールとした。テレビの利用にも応えられるようにしたわけで、これからは多目的に使われていくにちがいない。

国際会議場はかなり力を入れたところで、４カ国語の同時通訳設備を備え、楕円形型のテーブルで正式代表50名の国際会議はゆったりとできる。オブザーバー、記者席までも入れれば、約200名の会議は充分に可能。中ホールは300名程度の小集会用に作ったが、青年演劇もできるように舞台を広くした。また展示会場ともなるようイスは移動式にして利用価値を高めさせた。

宿泊の方は、ほぼ従来と同様に、青少年活動に使い易くするため、畳の大部屋を多くした。６階～８階はすべて和室、９階は各種集会の講師、助言者用ともなるよう15の洋室と小人数用の和室を用意した。

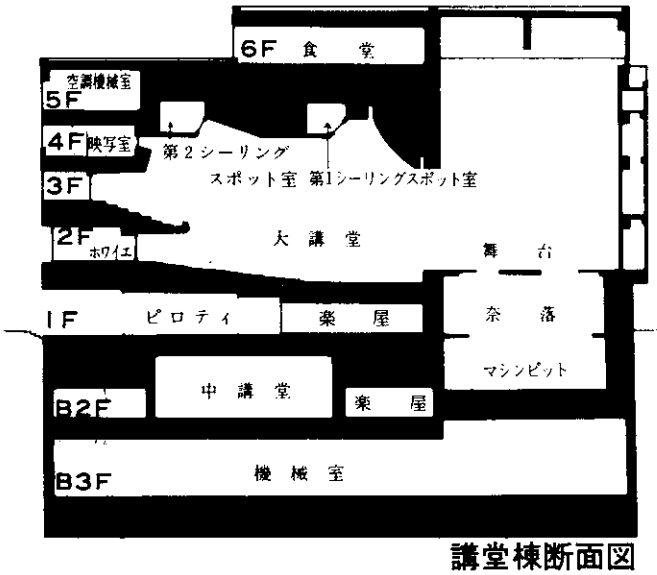
他には前述したように、三万冊の移動書庫を備えた図書室を設け、社会教育関係の調査研究に役立てることとした。現在、未整理の貴重な書類を整理しており、関係者の関心が高まることを期待している。また図書室と隣り合わせに、青年団資料室（青年団ルーム）を作り、ここには、46道府県の青年団をはじめ、青少年の育成に関する資料を県別に収納することとしている。



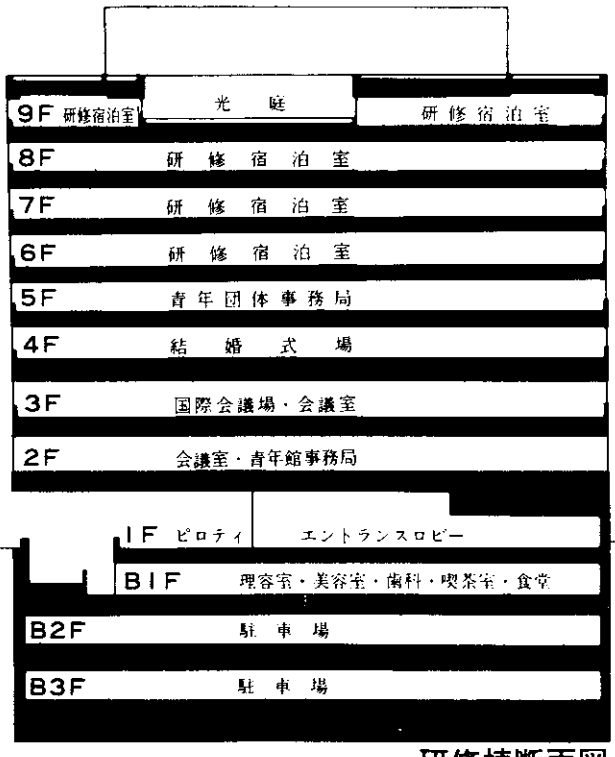
昭和54年３月　雑誌青年 竣工記念号

４階の結婚式場は、内装を華やかにし、宴会場もデラックスな雰囲気にして、勤労青年向けの式場を完備させた。

５階の団体事務所には、すでに４つの団体を入居させている。それらは中央青少年団体連絡協議会、全日本鼓笛バンド連盟、日本 BBS 連盟、日本青少年研究所など。



講堂棟断面図



研修棟断面図

各地でのとりくみ

（日青協刊　「日本青年館建設募金の早期完遂のために」より）

募金の達成のために各地でどんな方法がとられていますか……

各地域では、それぞれの特徴を生かして活動がなされています。１番多いのは１人千円募金です。50年前の団員が１人１円なら、我々は千円という訳で、組織の点検の上からも重要な意味を持っています。続いて、地域の各戸を廻る地域募金で、大きな実績をあげているところはこの２つを組み合わせたところが多く見られます。中には、１人が自分の所を地域、友人を含めて10人分１万円という募金をしている所もあります。

物品販売をしているところもたくさんあります。青年団オイルや青年団バッグ、乾物や日用品と商品は多様です。公害追放の運動と組み合わせて、無公害の石鹸を売っているところや、人出の多いところで「おにぎり」を売る等々まで数え切れない位です。

また、日青協新聞の拡大と組み合わせ、日青協新聞の還元金を募金に当てている県もあります。この方法は定着すれば、募金運動は終っても将来にわたって続く収入ですので、団の運営に大いに役立つ訳ですし、団の運動も伸びるという一石二鳥も三鳥もの方法でしょう。

県によっては自動車の「損害保険」の代行をしている所もあります。これは、自動車を利用するのは圧倒的に青年が多いこと、また事故を起す確率の多いのも青年であることから考えて、時代に合った方法ではあると思います。

昭和53年、福井県団の募金活動

廃品の回収をしている団もあります。省資源運動が叫ばれている時だけに地域の住民からも感謝と評価を受け、団運動そのものも強いものになって行った例もあります。

要は、方法はその土地、条件、それに取り組む青年団の力等を考え合わせながら、募金を達成し、そして青年団も強くなるようにいろいろ創意工夫をこらすことが肝要でしょう。

昭和51年 鳥取県青年団の歌謡ショーのポスター

新聞等で約三百五十万、物品販売や地域募金で約六百万、公演関係で約百万、さらに県団の運営資金として蓄えていた約五十万で一千百万を作ったわけです。

物品販売はハマチやのりを部落や町の祭りの前に斡旋する。地域の人々の生活と密着したものを取り上げました。かなり成果が上がりました。

司会　三重県から具体的に説明をして貰いましたが、山口県の百円募金の住民運動は全国的にも注目されていますが、その他のことも含めて……。

岡村　山口県が取り組みを始めたのは五十年からで、それ以前は何も知りませんでした。日青協の理事会等に来てみると、よその県団はもう募金運動もどんどん始めている。よし、うちの県もなんとかしなくては……と始まったわけです。先ず〝日本青年館の歴史〟を考え、〝青年団とは何か〟という原点に戻って、準備をしました。

岡村副会長

最初に県内二〇〇名の団員を集めて決起集会を開き、趣意書や募金台帳を作り、役割も決めて、各団員が各地域を一軒一軒廻って、トビラを叩き、額は小さいけれども、数多くの人々にあたろうと、一軒百円募金に踏み切ったわけです。十二月末には三百五十万が集まり、全国でトップに踊り出ました。しかし百円という低額のため五百万突破には大変でした。その辺から、その先どうしたら良いかと悩んで、実績の上がらなかった地域など、十か所で演劇公演に取り組みました。既に達成した所は自己資金にしましたが、それでも足りなく、去年は県の青年団発足30周年ということで、東南アジア青年の船という一大事業を組みました。しかし結果的には赤字になりましたが、いずれにしても日青館募金はやってしまおうと、今度は、チャリティ歌謡ショウ、ユパ公演などをやったわけです。その他県下の諸大会、諸集会等の参加費等でも少しずつ寄せ集めました。

これらのいろいろな活動の中で、日本青年館自体を知らない人々が随分多いこともわかったし、組織運動を進める上で自分たち自身の事務所を持つ必要性も痛感したわけです。山口の青年館は四十年過って老朽化しているし……ジプシー青年団や間借り青年団ではね……。結局、今度の募金活動は単位団自身も、自分たちの地域を見直すという点でも非常に勉強になったと思っています。

司会　秋田は如何ですか。

佐々木　秋田は現在四百万弱で全国的には中の上位ですが、これでも活発な市町村は一年も前から満額を納めているわけです。県団からオルグにいくと、直ぐ受け入れ、運動を展開する体制が取れている所もあれば、通知を知っても対応できない市町村もあります。そのために募金額が上がらないわけですが、今後は、八月に一千百万の六〇%、十一月に八〇%、明年二月には確実に一〇〇%と、新たな年次計画をたてて取り組みます。

ついでですが、福井、富山、長野などでは日青協新聞の拡大を五千部とか六千部とかに増やし、県下の全団員が足で稼こうとしています。

司会　この三月、伊勢で催された全国青研（全国青年問題研究集会）では、青年団が物品販売したり、興業したりするのは本来の青年団運動の観点からは、是か非かという論議もありましたが、その辺は如何ですか。

岡村　山口の場合は地域一軒一軒の百円カンパと興業の両方をやったわけですが、いずれにしても青年団と地域の信頼関係がなければ何も出来ないわけで、実質的には同じです。興業の時でも、青年団運動や新館建設の趣旨を挨拶の際にしているわけだし。

ただ百円でも二百円でも金額が少ない方が楽かもわかりませんが、興業の方が、金額が高いから、やる方は余程の力量がないと成功はむつかしいでしょう。

西井　三重の物品販売は、ハマチやノリの他におにぎりやオイルだのとがあります。ハマチやノリは漁業をやっている団員から仕入れてやり、比較的収益が上がった方です。かなりやったオイルは損はしなかったがうまくいかなかった。というのはオイルの交換に結局はガソリンスタンドや修理屋にいかなければならないというわけで、飛ぶようには売れなかった。ただ活動を通じて県下一円に館の建設運動の認識を高めたという成果はありました。

佐々木副会長

主に伊勢の参拝者に売ろうとしたおにぎりは失敗に近い。作った大半が残って米代がやっと……。これも県内の建設委員会が相談して、よしやろうと意気込んで夜通しにぎったわけですが、その苦労と失敗から、その埋め合わせをしようという意識を深めることには役立った。

京都の例でも廃品回集をして結果的には経費をくってしまい、収支トントンという失敗例もありましたが、普段廃品処理に困っている家庭からは〝青年さん〟が処理してくれたということで、青年団が見直されるという別の成果もあったわけです。

いろいろの活動をして、失敗したからむづかしい、もうやらないということでなく、失敗によっても周囲の人々の理解が深まったということを認識することも必要です。そして次のステップへの実践に生かすことが大切です。

佐々木　興業の話しですが、山口県の中村君は「僕は女房がいますが、二〇日間毎日毎日朝早く魚市場へ行きそこの人たちに、募金のための切符を売り続けた」そうです。その間四日間しか家へ帰らなかったという感動的な体験をしているわけです。ですから興業は簡単に人を集めて大量に稼げるという印象を持ったら大違いです。

岡村　全くその通りです。全国青研で興業で安易に収益を上げるのは青年団のイメージから、それはおかしいという意見が出たわけですが、およそ一つの興業で必要経費が六百万から七百万かかるわけですから、よっぽど腹をすえてかからないと大変なことになります。売れている歌手でも、どんな興業でも、二千枚から三千枚の入場券を売らなくてはならない。若い女子団員だって、一軒一軒、何度も何度も行って売る努力をしているんです。広島が森昌子ショーで二千七百枚ほど売って一八〇万程募金に入れたそうだが、これもかなり苦労しています。

西井　とらえ方はいろいろあるにせよ、観点の違いもあるでしょう。青年団の日常運動の中の文化活動で位置づけるとらえ方と、普段そういう活動をしていない所で、今回は館建設のための募金という方法論が問題になってくる。普通興業の四千円を青年団チャリティは三千円で千円安い。出演者が風俗的にどうこうでなく、一般大衆の娯楽としてテレビにも出ている。反対の人だってテレビは見ているわけだし、その辺を新館建設運動ということで割り切って考えないとスッキリしない、あるいは誤解を生じることにもなります。

岡村　物品販売にしたって、興業にしたって、相手に喜こばれて収益を上げていることは同じと思う。要は、とらえ方の位置づけをちゃんとしておけば良いわけです。我々は各地域で郷土芸能にしても、演劇活動にしても、その他、それなりにちゃんとやっているのだし……。

司会　秋田の場合、今までいろいろ出された実践例を、今後導入していくということは考えているんですか。

佐々木　秋田は当初から一人千円募金でやっているわけですから、やっていない所にきちんと徹底させる。あと七か月しかないので、変な小細工はせず、既定方針をつらぬくしかないです。

さらに、低迷している他の県団には、日青協と一層密にして打開の具体案を早急に作っていく必要があります。

岡村　山口県でもどこでもそうだと思いますが、達成金額の大体三倍近くの経費が実際かかっているんです。車のガソリン代から食事代まで一切の個人への支出はないわけですから、つじつまが合うはずがない。田沢義鋪先生の「おのれをむなしうして大いなるものにつかえよ」しかないわけです。三倍もの労力を使ってもやり抜くという精神力で全国の仲間が頑張るしかないでしょうね、五億の達成のためには……。

西井　確かに一千百万以上集めるのに三倍以上の労力は使っているでしょう。しかしその期間仲間同志を結びつけていく作業も同時に進行しているわけです。つまり組織の点検と拡大強化の面も大きいわけです。その成果がどれだけあったか、つまり幾らだったかなどと測れるものではありませんが、その結果は今後の活動に好ましく生かすという、この理解はかなり広範囲にわたっているでしょう。

岡村　一千百万やるためには、極端にいえば一万円ずつ千百人から集めればいいわけです。給料から一万円ずつ貰えばそれで終りです。しかし、それでは運動にはならない。どうしても地域を歩き廻る必要があるんです。例え額は小さくても、数多くの人にあたれば、それだけ運動も大きくなるわけですから。

司会　では、全国的な取り組みにも落差があるし、達成県団でもその市町村段階で落差があるといいます。それは、将来何らかの形で問題が生じ、組織にヒビが入いる恐れということはないんでしょうか。

岡村　うちの場合は割当を達成した郡市は二五でその半分の所もあるし、残念ながらゼロの所もありました。しかし、ゼロの所は今年度頑張って貰って、ゼロでやめるのではなく少しでも入れて貰う方針です。そのことがこの歴史的な運動に参加したことになるし、そうすることが日本青年館や日本の地域青年団運動の将来に好ましいことだと思うからです。

西井　三重は六九市町村のうち、ゼロという所は一つもなかった。ただ千円未満の所があったのは事実です。しかし、先程もいったように三重の会館建設と抱き合わせてやっているので、まだまだ引き続いていくことになります。既に達成した所は余裕を持って運動を進めていくし、それ程取り組んでなかった所は、仲間の実践を学んで、今後どう積み上げていくかが、今後の課題です。

司会　最後に、募金である以上、〝金額〟という実績が上らなければならないのは当然ですが、しかし、それだけが先行してしまって肝心な組織活動がおろそかになってはという心配の論議もあるわけですが、執行部の見解としては如何ですか。

佐々木　定期大会では、今の指摘が相当にあらわれました。金中心の考え方をしている、というわけです。しかし、このどたん場に来て、今は強力に推進するしかないという確認の発言が多く、結局、皆が力を合わせてやる。そして四十六道府県全部の仲間に還元していくような形で取り組もうということで意見がまとまりました。

司会　西井会長、最後のまとめとして……。

西井　日青協の運動を進める上で、この募金運動が単なる金集めに終るんではないかという懸念が一部にあるようなので、その辺を明確にしておきたい。趣旨は佐々木さんの通りです。

今まで何度か青年団は自主性を持とうといってきたわけですが、その都度それが行き詰まるのは、結局、自主財源が確立していないという問題で解決されないままになっているわけです。ということは、青年団が主体性を確立する、あるいは自主性を持った運動を展開する上で青年団が個々の財源をどれだけ出し得るか、どれだけ出すように働き得るかという一つの問題を提起された機会でもあるような気がします。ですから、今やっていることを見事にやり抜いてこそ、日本青年館が建ち、その過程から幾つかの教訓を得、それを今後の運動の参考にしていく。そうすれば、単なる金集めに始まって金あつめに終ったということにはならないと思います。

（文責―編集部）

訂正とお願い——上記金額の内、宮城県がもう八万納入済み。なお、各地域の募金活動の体験談等をお知らせ戴ければ本誌に掲載して、全国の仲間にお知らせ致します。

日本青年館募金実績一覧表　53年5月5日現在

順位	県団名	(実績) 募金額
1	山口県	11,068,863円
2	三重県	11,016,500
3	佐賀県	11,000,000
4	熊本県	11,000,000
5	愛知県	8,550,561
6	宮崎県	8,464,745
7	福岡県	8,245,662
8	栃木県	8,234,627
9	鳥取県	8,163,848
10	徳島県	7,164,366
11	香川県	7,135,282
12	愛媛県	6,270,000
13	大分県	5,825,584
14	長野県	5,145,025
15	山梨県	5,135,000
16	兵庫県	4,906,936
17	福井県	4,424,709
18	秋田県	4,168,617
19	滋賀県	4,090,861
20	広島県	3,901,300
21	富山県	3,855,460
22	宮城県	3,800,500
23	奈良県	3,735,123
24	京都府	3,615,748
25	静岡県	3,613,378
26	埼玉県	3,600,413
27	茨城県	3,380,631
28	山形県	3,372,170
29	青森県	2,982,000
30	高知県	2,961,892
31	福島県	2,931,060
32	千葉県	2,504,072
33	和歌山県	2,462,040
34	群馬県	2,452,794
35	北海道	2,438,980
36	神奈川県	2,151,413
37	岐阜県	1,875,296
38	鹿児島県	1,793,617
39	岡山県	1,408,000
40	島根県	1,218,842
41	岩手県	905,493
42	長崎県	902,560
43	大阪府	850,140
44	石川県	461,857
45	新潟県	318,231
46	沖縄県	257,192
	中央	3,978,330
	その他	7,683,924
	合計	215,423,772円

座談会

日本青年館 建設募金に取り組む地域青年団

（昭和53年刊「青年6月号」より）

新館完成予想図

左より西井勇会長（三重県）、佐々木英雄副会長（秋田県）、岡村稔志副会長（山口県）、司会水野光四郎（館建設事務局長）日本青年館仮事務所役員室にて。

司会　日本青年館の再建工事は、来春一月の竣工をめざして目下着々と進んでいますが、一方、自分たちの〝城〟を建てようとする日本青年団協議会はその建設資金カンパ活動を精力的に推進しています。過日の第28回日青協定期大会でも、募金活動が多くの論議を呼び、また、その時点で三重、山口、佐賀、熊本の四県団が一千百万の目標額を達成し、目標総額五億に対し、二億を突破しました。そこで今日は、今までの問題点とか状況、苦労話、今後の方向なり等々をお話しいただけたらと思います。最初に柳本前会長からバトンを受けた新会長の西井さんから、お願いします。

西井　今年の定期大会の特長は、足かけ五年にわたる募金活動の最後の年だし、また三億円を残しているという厳しい状況の中で白熱した討論が展開されました。運動方針としては、青年館の建設運動が組織の点検拡大強化のテーマとしながらも、基本的には募金集約を最重点としました。

全国的にはかなりのバラツキがあるわけですから、限られた今後の時間内にどう取り組むかということが、各県団から率直に発言がありましたが、ともかく全国の仲間同志が約束したことは必ず成し遂げていくということを新たに確認し合ったわけです。

司会　募金担当になった岡村さん、具体的にはどう進めていくのですか。

岡村　この日本青年館を我々青年団の力により建設しようという、当初の呼びかけから、今年は当時の決意を実際の形で答を出す最後なんですから、今年度で何がなんでもやり遂げようと気迫のこもった運動方針を提案したわけです。しかし現実問題としては、足並みが揃わなかった過去三年間をこの一年でどう取り戻すかということ、即ち、振わなかったにかくウソイツワリは一切なく、誠実に説明を繰り返しました。

募金方法は、基本的には郡市団21（今は20）の独自の方法にまかせましたが、主に団員カンパ、地域募金が大きかったです。ある日頃からも団活動の盛んだった所は、地域の家庭ぐるみカトリ線香の販売を推進し募金額を全部それで生み出し、団員負担がほとんどなかった位うまくいった所もありました。その他県団独自の分もありましたが、それはOBの会合、青年団の諸行事の際にカンパ箱を設置して、呼びかけたわけです。50万は突破したと思います。その他ピコもありましたが、あれは失敗。また、県下90市町村にも呼びかけ、町村三千円、市一万円などで百万程期待したのですが、組織の取り組みの段取りがうまくいかず、全部を廻り切れず、精々15万一寸でした。

私は日本青年館へは51年度の募金推進委員会に一度行っただけですが、これからは、日青協、日青館とも、地域へのPR活動をもっともっと積極的にやり、地域青年に忘れられないようにしていただ

■誌上参加

地域へのPRをもっと

岡田敏夫（熊本県団前社会部長）

成し遂げた今の心境を一口でいえば、ポッカリと心に穴があいた感じです。私は51年からの担当でしたが、いかに日本青年館が団員に馴染みがないかということで、その年は郡市団のオルグに駆けずり廻りました。館の意義を強く説得し、館の生い立ちからこれまでの役割まで、さらに将来の青年活動への貢献など、と

西井会長

県団もいろいろな事情があるにせよ、最終的には五億をやり遂げる意気込みが必要です。

今後の取り組みとしては、八月末までに三億までもっていき、十一月の全国青年大会時までに四億、来春の最終〆切には五億と段階を踏んでいきたいと思っています。

今までは県独自の取り組みであったのを、今年は各ブロック内でお互いに連携を取りながら、そのブロック会議もなるべく早く、六月中にも開いて、良い経験を教訓としながら、募金体制の仲間の連帯の輪を広げていきたい。勿論。執行部のオルグ体制を充実させ、アドバイスも欠かせません。

端的にいえば、大正時代の青年が一人一円カンパで建てたこの館を、同じ後輩である我々がそのご苦労なり、志を無にすることなく引き継いでいくという気迫を示すしかないでしょう。この非常事態を、私は全国の仲間の信頼と友情と決意によって乗り切り、必ず目標は達成すると自信を持っています。

司会　佐々木さん、実際に全国をオルグで廻った感想は如何ですか。

佐々木　達成への段階から各県団を見ると幾つかのタイプに分けられます。一つは既に達成した県団。三年間の年次計画をたて、それに従って確実に活動を進めている県団、そして役員交代があり、引き継いだ時点で新たに募金取り組みをし直している県団。さらには引き継ぎが十分でなく具体的な取り組みができないでいる県団、と分けられるようです。当初の募金額が三百五十万から一千百万になった経過の中で三百五十万で年次計画をたてていたのを、改めて下部へおろすのにかなりの時間が要したということもあります。富山などはいい例で、昨年末、県下、四ブロック毎に全市町村団の三役クラスを集めて説明会を行い、それが今年の定期大会に生かされ、年度内には必ず達成の確認をしています。

また一千百万で年次計画を当初よりたてたが現実の問題として数字が上がらない、という状況、心配があります。が、およそ三分の二は募金活動を日常的な行動にしているといえます。あとの三分の一が日青協は勿論、館側の建設委員会等との連絡を密にする必要があります。極端に額の少ない所の、来春までの底上げの方法が、早急に検討されなければならないと思います。

司会　それでは全般的なことから、次に達成した県団のご苦労振りをあからさまにだして戴けませんか。達成突破、トップの西井さん、日青協の会長の立場ではなく、地元、三重のご苦労話を聞かせて下さい。

西井　今年の定期大会では、各県が地元の青年会館の建築中や建設計画等を抱えている所が随分あり、そのための募金や資金づくりやらと日本青年館の募金のからみで苦しんでいる面があります。特に完成した所で借金を抱えているのが目につきます。三重自身も、日本青年館の改築が打ち出される前から、自前の館を持とうという計画があって、その体制を積み上げていました。その時点に日本青年館建設の具体案が出されたわけで、もし三重が館と平行して取り組んでいたら、今、悩んでいる幾つかの県と同じになったと思います。当時の意見として二つ平行して、うまくいけば良いが、もしやっていけないなら、日本青年館の方が具体化しているので、それを優先し、その後、その運動の教訓を地元で生かして三重の会館を建てていこう、としたことは良かったと思います。

ただ、一つ心配だったのは、日青館募金を前提にすると、いずれ館がたち上った後、改めて地元の募金に入っていくことになり、なんだかあの募金やこの募金やと形の上でやりにくくなる。それで三重の場合は、日本青年館・三重県青年会館の二つのタイトルで最初から募金を打ち出し、早く納まったものから順次日青協に納めていく。従って館がたっても、募金タイトルは、日本青年館・三重県青年会館募金と並べて進んでいきます。

募金の内容は当初は、あらゆる集会、活動具体案の中で進めました。それと当時日青協新聞が定価八百五十円、それを千円にして購読運動を展開し、二千部程拡大しましたが、これはかなりの額になりました。物品販売もやりました。これは利益が上ったものは、いったん地域（市町村）へ還元して積み上げ、その収益は地域募金として評価する形をとったわけです。

一千百万の内訳は、最初の段階のカンパやんだり、全国的つながりを求めるなど、組織問題や学習テーマを前面に出していったわけです。必ずしも募金のためということではなかったのですが、当時千円の新聞で五百五十円のバックがあったから五千部で二百七十五万になります。52年度も同様でしたが、それが、郡市の部数達成に困難な状況もあったし、新聞のみでは募金達成も先行き無理があるということから、末購読者には、カンパ分の納入を要請したり、その他、県団事業の参加費等でも相当集めました。

とにかく佐賀は田沢先生や下村先生の出身地で、今も館の理事に平野、大坪の両先輩を出しているなど、日本青年館との特別な歴史的な関係から、とにかくやればできるんだ、募金は達成しようと皆頑張りました。

これからはスッキリして本来の青年団運動に戻りたいものです。やはり組織の強化のために、例えば未加入単位団の問題等、地元の内部へのオルグを強化したい。無論OBとの連携強化も重要です。

きたいものです。今年限りで現役を退きましたが、私は、いつ行けるかどうかわかりませんが、その内に一度完成した日本青年館を訪ねてみたいものです。

■誌上参加

新聞拡大に取り組む

田島健（佐賀県団前団長・現日青協常任理事）

佐賀の場合は、日青館の改築前の、48年の県の青年会館の募金がありましたので、当時は団員に募金疲れが相当ありました。団員カンパや地域募金も仲々むつかしく、物品販売もういやという雰囲気でした。それではというわけで、日青協新聞の普及拡大に取り組んだわけです。

51年度から一団員一部、他に先輩の皆さんやら、各職域、行きつけの飲み屋、喫茶店等々……、町村では、何故新聞を読まねばという意見もありましたが、OBにも手伝って貰ったりして、それが小さな町で百部など、全県で五千五百に達したわけです。新聞に取り組んだのは、新聞を通じて、いろいろな活動状況を学

生まれ変わる日本青年館

関東ブロック会議開催

（昭和53年刊「青年８月号」より）

５億円募金完全達成を昭和53年５月の定期大会で再確認した日青協と各府県団は、本年度の推進第一弾として、全国を八ブロックにわけて募金推進会議を開いた。

関東ブロックは同年６月17、18日の両日、栃木県青年会館を会場に山梨を除く六県団の団長さんなどが参加して行われた。総勢47名、日青協・青年館の役職員を含めて50名であった。関八州の親分衆が、募金達成打ち合せのため宇都宮に相集うというか、一県一千百万円、なにがなんでもやりぬくぞとマナジリを決した四十七士の勢揃いというか、会議は終始熱っぽい雰囲気で進められた。

会議第一日は幹事県の千葉県団藤代会長の募金完成達成を訴える力強いあいさつで始まり、日青協・太田、日本青年館・富田両総務部長の新館状況、募金状況報告が行なわれ、午後９時から懇親会。さらに各県持参の地酒が各部屋に持ちこまれ、青年団お得意の寝床分科会が延々午前３時頃までつづいた。募金をめぐる悩みや苦しみなどのホンネの情報が交換され、明日からの行動力のエネルギー源となって蓄積されていく。お酒はダメ、11時消灯です式の、お役所管理による『青年の家』では見られない風景で、現代版若者宿ともいうべき青年会館の面目躍如たるものがある。

第二日目は情報交換と決意表明、いわば募金の戦術会議であった。以下、主な発言からその情況を再現してみる――。

埼玉（松田才治団長）　日青協大会で一県350万から1,100万円にきりかえた段階で混乱が起こり、一郡60万、六郡分の360万と県団役員一人５千円を決めたままで、二年間運動がストップしている。来月市町村団長会議を開いて対策をたてたい。すでに全国では四県が満額を達成しているので、OB、市長会、町村会等の協力を得てやりとげたい。

神奈川（小俣善幸会長）　県青協の組織は三市一町、割りふりが困難な状態であるが、現役は平塚市を中心にして、主体の募金推進委員会の協力を得ながら、市長会、町村会にも働きかけて目標を達成したい。

群馬（原沢順一会長）　県青少年会館募金が先行しややおくれぎみだが、今年は日青新聞の拡大や一口三百円募金活動を展開しながら、どうしてもやりぬく覚悟である。

茨城（宮本勉会長）　50年から取り組みを開始、一市町村20万円の目標を決めた。一口千円を基本とし各市町村の状況に応じて進めてきた。募金の他、廃品改収、村有林伐採、電話帳配布、青年団事業益金より、などの工夫が行なわれ、25市町村中八市町村が達成した。緒川村のように有線放送で呼びかけながら全戸を廻って協力を要請し、目標額の四倍（80万）を集めた地域もあり、栗林先輩（元日青協

日青新聞
仲間50名全員足をフル回転
緒川村青年団
青年館再建運動
百円募金で八十万
千戸五百数
「ガンバレよ」村民の励しに
夢中でまわった二十日間

茨城県緒川村青年団の募金活動を紹介した昭和51年６月号日青新聞１面

会長）らの積極的な支援もあるので、７月までに６百万、９月に９百万そして11月には目標の1,100万円を是非とも達成したい。

千葉（藤代武雄会長）　50年に一人千円募金を進めたが趣旨が徹底せず、なんとなくとられたという雰囲気から、その後二年間中断してしまった。もはや理くつぬきでやらなければならない。三芳村のような過疎地帯の青年団に、OB を含めた募金推進委員会が発足し、逆に県団が激励されるようなこともある。足を棒にして全県オルグを行ない、目標達成をはかる覚悟である。

関ブロで現在先行しているのが**栃木県団（矢口有良団長）**。農協募金50万を含めて944万円、86％の達成率である。募金方法はきわめて多彩でまさに青年団的という形容がピッタリである。

日青協大会（51年５月）決定の1,100万円を組織決定にもちこむまでに、理事会を重ねること四度、七カ月に及ぶ説得と討論がむし返された。その背景には栃木県青年会館建設のための三千万募金による疲労感が影響していたかもしれない。

募金は OB が先行し、県団役員経験者一人５千円（団長２万円、三役１万円）募金で総計165万円が50年度に日青協に納入された。現役は登録団員数を基準に市町村別に目標額を決定し、方法は自由とした。

まず県都の宇都宮市が千昌夫ショー（52年８月10日）の収益金133万円を納入し、牽引車の役割を果たした。ついで、鹿沼市が新沼兼治ショー、今市市が南沙織ショーで大成功を納め、いずれも100％を達成した。

歌謡ショー成功の背景にはマスコミの全面的協力があった。プロダクションとの交渉、ポスター作成、ラジオによる宣伝等は栃木放送がほとんど無料に近い全額で協力をしてくれた。街中に張り出されたポスターには、主催○○青年団の名と共にこの益金が日本青年館建設資金に当てられることを明示した。宣伝が行き届いたところで、今度は青年団お得意の機動力を生かした人海戦術。一戸一戸を回って日本青年館建設の意義を説き、前売券の購入をお願いして歩いた。この活動を通して青年団の存在と日本青年館再建は多くの市民の認識と共感を呼びおこしたのである。

今市市ではこの計画が発表されるや、地元興行師がその一週間前に宇都宮出身歌手の森昌子ショーをぶっつけてきた。青年団は公演を一カ月ずらした。前売券は2,500枚もさばけたが、当日昼夜二回公演の聴衆は２千人であった。５百人は主旨に賛同してカンパをしてくれた人びとであった。会場では国連

軍縮総会に向けての核兵器完全禁止の署名をお願いした。歌謡ショーを青年館の募金と軍縮の署名と青年団の PR を結びつけたところはいかにも青年団的である。

鹿沼市では四年前から自前の青年館建設運動が進められており、毎年この種の催しで建設資金が蓄えられてきた。今年はこの計画の一部に日本青年館再建が割りこんだのであった。

大きな人口と劇場をもたない町村では統一劇場の『おっ母さん』公演、映画『同胞』の上演などが行なわれた（上河内、河内、黒羽、芳賀、南那須他）。どの会場もお年寄から子供まで集まって盛況であった。青年団は改めて、伝統の重みとやれば出来るという自信をつけたのであった。一人五百円、千円募金に徹したところも多い。市見、氏家、大平、葛生、西方、馬頭、真岡、壬生などの町村団で100％またはそれに近い数字をあげている。

労力奉仕型としては、日光の美化作業、矢板の下草刈り、栗野の献血、葛生の街路樹伐採などがある。この他、栃木県団史の販売（大平）、20年史販売（上三川）、ダンスパーティ（矢板、塩原、喜連川、高根沢）、盆踊り（黒羽）、オイル販売（喜連川）、売店益金（栗野）、運営費より拠出（国分寺）など、さまざまな工夫が行なわれており、今年度中には全県100％達成をはかりたいと、矢竹団長はひかえ目に決意を披瀝した。

関ブロ大会の経験交流を通して宮崎勝次監事は次のようにしめくくった。「組織を固めてからの募金は、守りの姿勢である。青年団は行動するなかで成長する。募金活動を成功させることによって組織が強くなり、地域社会から評価されるようになってきた事実を率直に評価しようではないか」。

九州ブロック会議開催

（昭和53年刊「青年８月号」より）

九州ブロック会議は、昭和53年６月３、４日、熊本県天水町で行なわれた。この町は、四年前、日本青年館再建募金運動をスタートさせた頃、九州で最初に大激論をかわした想い出の地でもある。

当時、熊本県団は、青年自らの施設とはいえ、東京では活用できないという意見と、日本の青年の魂がはいった、青年のための施設がどうしても必要なんだ、という意見に分れ、夜半まで論議が続けられた。

確か、執行部から「50年前の青年たちが困難を克服し、自力で建てた〝館〟が老朽化して、使えなくなってきた時、われわれは、何をなすのか、後輩たちの運動をどのように保障しようとするのか……。青年のための拠点を皆んなの力でつくりあげていくことこそ、われわれの使命だ」というように、単にお願いするという消極的なものでなく、青年の役割というか、共通の使命感をおびたかたちで全員が確認し合ったものだった。

あれから四年、九州の仲間たちが、約60名、この町に集った。それも同じ日本青年館の建設運動を前進させるという共通の課題をもちよって。

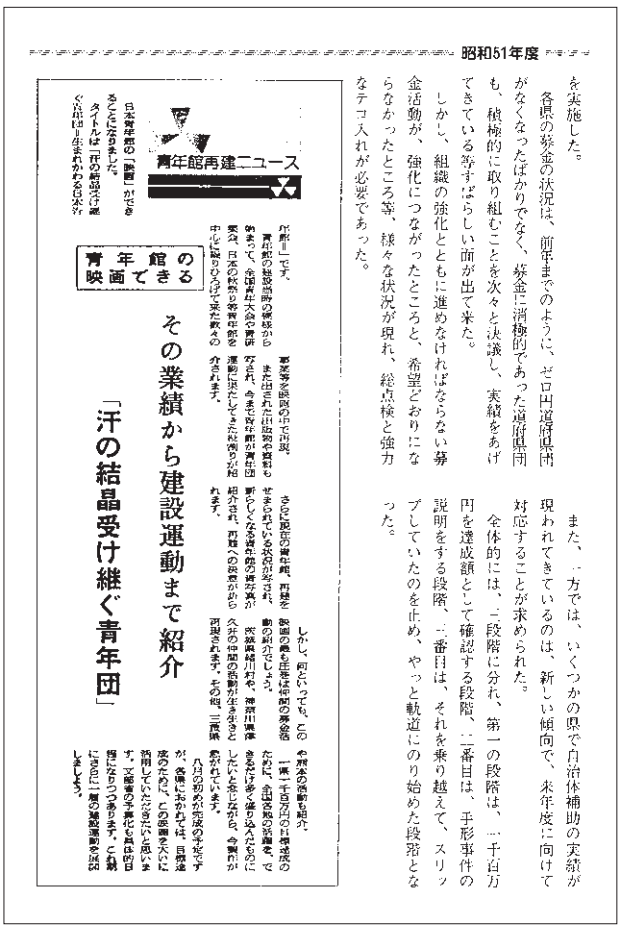
会議は、一県1,100万円をどのようにして全県が達成していくかという点に焦点をしぼり、各県の現状を報告し合いながら、すでに達成された、佐賀、熊本の実践活動を家心に討論を深めた。

まず共通していえることは、組織はあるが全く募金活動がなされていない市町村がどこの県でも３～４カ所あるということを考えると、オルグ活動を展開しながらも、対応するだけの組織力のない市町村への対策と、一方では、そのことを考慮にいれた綿密な計画が強く要請されている。

また、一人千円募金（熊本、大分）、日青新聞の普及拡大（佐賀）、映画上映運動（福岡）、物品販売で失敗し、千円募金に切り替えた宮崎など、活動内容はそれぞれのもち味を生かしたとりくみがなされており、物品販売以外は着実な実績をあげている。ただ長崎、大分のように県青年会館建設時の負債を数千万円もかかえているところは非常に厳しい立場にたたされているが、他県の数倍のエネルギーをかけても必ずやりとげるという堅い決意を表明していた。

熊本、佐賀の仲間も達成したからといってこの活動を打ち切るようなことはしない、あらゆる機会を通して持続させていくというように、困難だからできないとか、達成したから後はしらないというような空気は全くみられなかったし、完成するまでみとどけたいという積極的な青年の意見が多く、たとえば、「工事の進捗状況を写真でもいいから送ってほしい」「完成しても東京に行けるかわからないので、テレビを通して様子を知らせてほしい」「全国の集団活動資料をそろえよ」「誇れる青年団活動のセンターに」「日青新聞を必ず購読するので、特集版を組んで詳しく伝えてほしい」等々、九州という地理的条件下の希望や、機能面での意見が強くださされ、募金ができないとか、やれないという意見は最後まで聞かれなかった。そのせいか、懇親会の席は大変に気勢もあがり、たのもしい限りだった。

（沖縄、鹿児島が県団行事のため欠席、青年館から平野、大坪両理事と緒方評議員が出席）。



昭和51年度

を実施した。

各県の募金の状況は、前年までのように、ゼロ円道府県団がなくなったばかりでなく、募金に消極的であった道府県団も、積極的に取り組むことを次々と決議し、実績をあげてきている等すばらしい面が出て来た。

しかし、組織の強化とともに進めなければならない募金活動が、強化につながったところと、希望どおりにならなかったところ等、様々な状況が現れ、総点検と強力なテコ入れが必要であった。

また、一方では、いくつかの県で自治体補助の実績が現われてきているのは、新しい傾向で、来年度に向けて対応することが求められた。

全体的には、二段階に分れ、第一の段階は、一千百万円を達成額として確認する段階、二番目は、手形事件の説明をする段階、二番目は、それを乗り越えて、スリップしていたのを止め、やっと軌道にのり始めた段階となった。

青年館再建ニュース

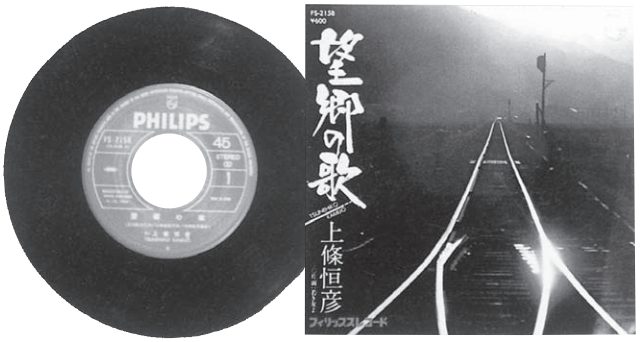
その業績から建設運動まで紹介

「汗の結晶受け継ぐ青年団」

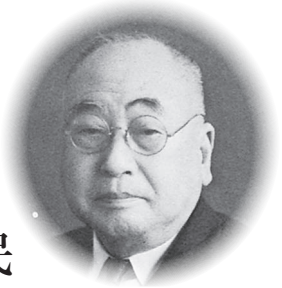
青年館の映画できる

募金活動のいろいろ

- １戸100円募金運動
- 野菜市
- 日本青年団新聞購読運動
- 統一劇場・わらび座・新制作座等の公演
- 映画上映運動
- バザー収益（運動会等）
- 全国青年大会・県青年大会参加者募金
- チャリティショーの開催（石川さゆり・山口百恵・新沼謙治等）
- コーヒー販売
- 秋まつり収益
- みかんの摘果
- ダンスパーティー益金
- 美化作業報償金
- 下草刈り
- 献血謝金
- 青年団誌販売（書籍販売）
- 自動車用オイル販売
- 街路樹伐採
- 盆踊り益金
- OB 募金・団員500～1,000円募金
- 県団役員１人20,000円募金
- カルタ発行収益
- クリスマスパーティー収益
- 門松を作り公民館・商店・個人宅に売る
- 選挙立候補者のビラ撤去（選管及び候補者からの謝礼）
- 日青協マーク入りタイピン販売
- 廃品回収
- 全国青年大会参加者による１人5,000円持ち寄り運動



初代会館建設当時の思い出



元日本青年館理事　故 田子　一民

日本青年館の建館は決して単純ではなかった。

内務、文部の省内の調整やら連絡は始終チグハグになったり事欠くことが多かった。長野の青年団は反対の急先鋒であった。新聞はこの傾向をおもしろおかしくとりあげて反対気勢をあおるので反対は猛烈をきわめた。とくに青山会館の建設を企画していた徳富氏を社長にもっている国民新聞の攻撃は急で、文字どおり内外まことに騒然たるものがあって、日本青年館建設の雲行きは険悪で楽観を許さないものがあった。

日本青年館の建設には以上のような曲折はあったが、しかし着々その計画はすすんだ。わたくしはひそかに考えた。日本青年館の建設は大正期の青年の一大感激の結晶である。この会館の建設によって日本の勤労青年大衆の飛躍的発展をみるであろう。ついてはこの会館の建設完成のあかつきには、勤労青年大衆のために皇太子殿下より御下賜金を頂戴して永く皇室と勤労青年大衆をむすびつけたい、とこう考えてわたくしは、ある夜ひそかに牧野伸顕宮内大臣を麹町の官邸におたずねした。そしてわたくしの所信をのべて、御下賜金がいただけないものかをおうかがいした。牧野宮内大臣は快くこれをお引き受け下さって、なんとか御沙汰のいただけるように努力することを約束された。

日本青年館はいろいろな障害にあいながらも大正14年10月完成した。開館式当日は、皇太子殿下にはとくに御来館あらせられ、銀製大花盛器と御内帑金10万円の御下賜があった。一同は感激した。この御沙汰をきいて往年わたくしは牧野宮内大臣に内々お願いしたことを思い出した。果してそれが原因になったものか、あるいは殿下の御発意によってなされたものかついに牧野宮相にそれらの経緯をきく機会を失ってしまったのは残念であった。

日本青年館が現在の位置を決定するまでにもいろいろな思い出がある。現在の敷地は当時の内務省神社局所属のものと陸軍省所管のものとの両方にまたがっていた。内務省神社局のものは直ちに使用を許されたが、陸軍省所管のものは、竹橋の連隊に関係があるということでそこに交渉せよとのことだった。そこでそこを訪ねた。出てこられたのは後の陸軍大臣寺内寿一さんで、わたくしは来意をつげると寺内さんはあの辺には陸軍の火薬庫があるはずだ、それを早速片づけてご希望にそいたいと即答された。そのてきぱきしたさばきには全く感謝した。こうして日本青年館の敷地は決定されたのであった。

（昭和50年刊「日本青年館50周年記念」より）

大正青年の哀歓

――初代日本青年館解体を前にして――

元田澤義鋪記念会事務局長　故 成田 久四郎

青年館から眺める窓外の風景が戦後とくに東京オリンピックを機に大きく変容した。南隣りには近衛歩兵第四連隊の兵舎があった。今はアパート群がひしめき、国立テニスコートとなり、兵舎の一部が改造された国学院高校の校舎に変った。

西側の広場は、かつて民家が立ち並んでいたがオリンピックの際に立退きをさせられ、明治公園となり、今は学生や労働団体のデモの基地として騒然たる巷と化すことしばしばである。東側の野球場の隣に相撲場があり、その周囲の桜の花の下で大いに英気を養ったのもついこの間のような気がする。それも今は高度成長の波で第二野球場に変った。

昭和二十年八月十五日、終戦の日、青年館にたむろしていた東部軍の輜重（しちょう）隊からビール

の放出があり、バケツに杓という豪勢振り、戦時中のこととて何年かお目にかからなかったものだけに大いに痛飲したことであった。空は青く晴れ、周囲の木立から耳を聾するばかりの蝉しぐれを生涯忘れることはないだろう。

半世紀を歩みつづけた青年館本館は姿を消し、いよいよ再構築されることになった。この上は青年団、青年館の道統が永遠にゆるぎなく継承されるよう念ずるのみである。（昭和52年刊「青年１月号」より）

旧日本青年館の建設工事

元青年館電気技師　故　小川　憲治

大正十二年十月の大震災後、私は旧神宮競技場の電気工事に従事していた。その当時の外苑には震災避難民がバラック住いをしており、青年館は地鎮祭も終り、土方が基礎工事の穴拙をしていた。青年館事務所は昔「御鷹の松」があった今の国立競技場代々木門にあり、建築事務所は二階建で今の銀杏の木の場所にあった。当時の私の現場に対する工事のことを記しておきたい。工事内容については熊谷辰治郎先生が発行された「大日本青年団史」の中に良く示されています。職員は建築技師主任木村栄次郎さん以下十人程の方々で大工、左官、水道、ボイラー、電気等の技術各担当者がおり、現場を受け持っていました。左官、土方等の飯場は、先日までわれわれのプレハブ仮事務所（二代目建設時の）があったところで、これは不思議な縁です。或る日コンクリートの打ち込みを終り夕方になった頃、バーンと大音響がしたので皆寄ってみると打ち込んだコンクリートが飛び出し、パンクしていたことを今でも思い出す。

この様なことは時たまあった。電気、水道、ボイラー等の工事は戸田組の下請でなく直接青年館の請負で、この点、各業者は苦労致しました。現在の新館工事とは全く変っており、建築方法というか、技術が進むと共に工事の内容も素晴らしく良くなった事をこの度の（二代目）新館工事で知り、感心したものです。（昭和54年刊「青年３月号」より）

二代目日本青年館再建運動回顧

日本青年団協議会第20代会長　柳本　嘉昭

1976年（昭和51年）５月、全役員辞表を懐に忍ばせて第26回日青協定期総会に臨んだ。日本青年館再建構想時以降の榎、谷川、東、杉本、萩森日青協歴代各会長、歴代同期役員諸兄姉の意志を継ぎ、青年団の将来を決定・左右する重要な再建募金運動提案を紛糾の末、原案通り承認頂いた大会でありました。

全国の団員は物品販売活動（自動車オイル・インスタントラーメン・各種催事での手づくりおにぎり・高麗人参茶…等）の販売利益金や、市町村集落を軒並み巡回しての、一戸100円募金活動等々…展開されました。

ご皇室からの激励、青年館中興の祖小尾乕雄理事長、後藤文夫会長のご指導、同期の日青協役員・道府県団役員・幹部の皆様、嶋田事務局長に団結する事務局員の皆様、文部省・全国知事会・全国の青少年団体はじめ、表現し尽せない数々の団体・機関・名士・各位の善意と温かなご支援に支えられ、新館の外観が出来た時、心半ばでありましたが、以後を次期西井会長はじめとした指導層に託しました。

影ながらの国の支援

元日本青年館常務理事　水野 光四郎

日本青年館の再建は昭和40年代から始まっていた。老朽化していたからである。その頃文部省の社会教育審議会では、青少年団体の会館建設にも補助していいのではないかと議論されていた。国は青年館への６億の補助を決めてから、船舶や自転車振興会にも影ながら声をかけてくれた。日青協募金などを含め約29億の資金が見込まれた。足らざる25億は、年金福祉事業団から借りることにしたわけだが、問題はその借金を返済しながらやっていけるかであった。

一時期、私は毎週のように文部省の青少年教育課をたずね、金田忠一係長と収支計算の計画書作りに追われた。時には青年館の地下の「イーグル」で慰労し合ったこともある。彼は必ず２千円置いていった。昨年の暮れ広島の奥さんから訃報が届き、69才で亡くなっていた。そんな悲しみも伴いながら、来年の青年館解体の時には、私はきっと涙するに違いない。（当時の新館建設事務局長）

青年館でスタートした友の会

全国友の会　代表　北脇　満子

全国友の会は1930年（昭和５年）11月15日に日本青年館で「全国友の会成立を告ぐる会」を開催し、「封建的、個人主義的な気風を清算して愛・自由・協力による新しい家庭と社会を創り出したい」という決議文を持って、友の会の成立を世に訴えました。

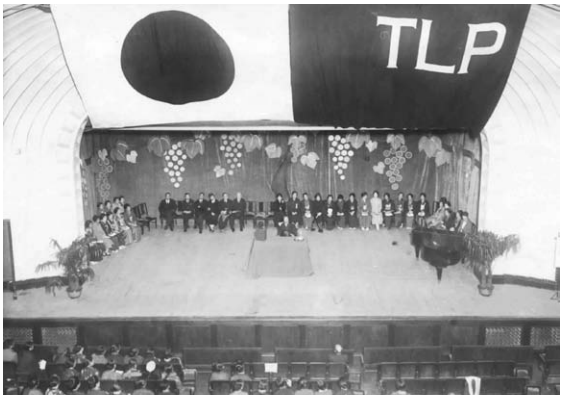
友の会は雑誌『婦人之友』の愛読者によって誕生した全国組織の団体です。

その後毎年、地方からの出席者は青年館を宿舎として利用させていただいています。

昭和18年～20年は戦争のため、全国友の会大会は中止されました。

全国友の会創立30周年など記念の年には日本青年館大ホールで式典を開催、1984年の第51回全国大会以降は大会の２日目を大ホールで開催させていただいています。友の会の願いをよく理解し、ステージや看板の製作などに協力していただきました。毎年、大会担当が変わる友の会会員を経験のある青年館の方がいろいろ助けて下さいました。

新しい日本青年館の出来上がるのを心より楽しみにしています。



演壇に立っている羽仁もと子

57年の歴史、「もうひとつの甲子園」

全国高等学校定時制通信制軟式野球連盟事務局長　益田　勝寛

昭和29年に群馬県高崎市で始まった全国高等学校定時制通信制軟式野球大会は、今夏（平成26年８月）で61回を数えました。第４回大会で会場を明治神宮野球場に移した時に初代日本青年館にお世話になってから、57年もの長きにわたり大会に参加する選手を美味しい食事と快適な客室でもてなしていただきました。お陰様で日頃の練習の成果を遺憾なく発揮することができ、毎年すばらしい熱戦が繰り広げられています。

我々役員は大会期間中一週間程の泊まり込みになりますが、その間選手と同様にもてなしていただくことはもとより、大会運営に支障が生じないよう夜中まで大会本部の会議室を使わせていただき、また雨天で順延したときのことまで考慮して客室や会議室を押さえていただいているお陰で、これまで無事に大会が続けられています。

雨天のため開会式を日本青年館中ホールで開催

今までお世話になりました初代、二代目日本青年館に感謝申し上げますとともに、三代目日本青年館がすばらしい発展を遂げることをお祈り申し上げます。

新ホールに期待を！

宝塚歌劇団　理事長　小林　公一

昭和60年頃。本拠地宝塚大劇場に隣接する宝塚バウホールだけで実施していた公演を“東京でも見たい”という要望に応えて、東京でも上演すべく劇場を探すことになりました。結果、草月ホール、簡易保険ホール、日本青年館等で公演をするようになりましたが、今日まで定期的に公演が継続しているのは青年館だけです。

予定の決まらない私たちの公演スケジュールを根気よく待ちホール利用の日程調整に最大限の配慮をして頂く等、皆様には日頃から大変お世話になっています。私も平成元年からの星組プロデューサー時代に頻繁に青年館を訪れており、その記憶は今なお強く残っています。

さて、青年館が新しくなると聞いて、どんな施設になるのかと“ワクワク”しています。ハードウェアのみならず、スタッフの“暖かさ”も更にパワーアップした施設に生まれ変わるのではないかと期待をしています。新ホールになっても宝塚歌劇団を何卒宜しくお願いします。

宝塚歌劇百周年
日本青年館公演ラインアップ

日本青年館ホテルを利用して

公益社団法人　国際農業者交流協会

本協会は国内外の農業青年の育成に携わっている団体で、長年に亘り日本青年館の会議室や宿泊施設等を利用していましたので、この度の休館は私共にとって大変大きな痛手です。

その一つが海外派遣農業研修生の帰国時研修です。１年余に亘る欧米各国での農業研修を終えた青年達が久々に味わう日本の味が青年館６階での夕食、その後７階にある大浴場で日本の風呂にどっぷりと浸かって「ああ、日本だ」と感激、夜は同期の仲間達と枕を並べた布団の中で、お互いの苦労話を夜が更けるのも忘れて語りあう、これが当海外研修のクライマックスです。

「バス・トイレ付シングルルーム」とプライベートを重視する宿泊施設が主流となった昨今、青年館

の施設はこの研修のフィナーレと彼らの門出を演出するに最も相応しい舞台でありました。これまでのご支援に感謝申し上げると共に、新たな施設もそうあって欲しいと願っています。

オリンピックで生まれ、転居する霞ヶ丘団地

霞ヶ丘町アパート　井上　準一

私自身は千葉県で昭和20年に生まれ、1949年（昭和24年）に霞ヶ丘町に引っ越して来た。当時、青年館前に元近衛歩兵連隊の兵舎があり、今の明治公園からこのあたりはみんなバラックの建物が建っていたという。

昭和39年の東京オリンピックと並行して現在の10棟300世帯の都営団地「霞ヶ丘アパート」が出来る。父が八百屋をやっていて、ご近辺のお店と一緒に要望して居住者のために団地の６号棟１階に八店舗入れるようにしてもらい現在に至っている。

今回移転させられる青年館も、ご近所なのでよく地下にあった矢口の床屋さんに行った。団地のみなさんも結婚式や町会の食事会、周年行事などでよく利用させてもらった。

二度目の東京オリンピックにより団地がなくなり、転居せざるを得ない事態は残念。すでに居住者の半分は移転し、残りの居住者も高齢者が多く先行きがみなさん不安ではあるが、最後まで新たな希望の旅立ちとの思いで元気にやっていこうと話している。

青年館屋上からみる霧ヶ丘町アパート

青年団と日本青年館の沿革

年　月　日	事　　項
明治44年２月21日	山本滝之助、雑誌『良民』を創刊
大正５年１月１日	中央報徳会青年部を設立、11月３日青年団中央部と改称
大正８年10月	明治神宮造営工事、青年団の最初の労力奉仕作業開始
大正９年11月	令旨奉戴を記念して日本青年館建設の議おこる
大正10年６月 ９月２日	全国青年団員の名をもって「日本青年館建設宣言書」を発表 財団法人日本青年館設立許可、近衛文麿が初代理事長として就任
大正11年５月 ６月	青年団中央部の事業を財団法人日本青年館に継承 雑誌『帝国青年』、青年団中央部より日本青年館に移管（翌年１月号より『青年』と改題）
大正13年11月 11月５日	第１回明治神宮競技大会の一部として全国青年競技大会を開催 一木喜徳郎が日本青年館理事長に就任
大正14年4月15~17日 10月26日	大日本連合青年団発団式ならびに第１回全国青年大会を名古屋で開催 日本青年館竣工、開館式を挙行。当日、第１回郷土舞踊と民謡の会開催
大正15年８月５日	井上準之助が日本青年館理事長に就任
昭和２年４月	日本青年館の事業のうち、教育に関する事業を大日本連合青年団に移管。大日本連合女子青年団発団式ならびに第１回大会を日本青年館で挙行
昭和４年10月２日	『青年カード』創刊
昭和５年１月11日 １月28日	小金井に移築した御大礼建造物を日本青年館分館とし、「浴恩館」と命名、３月20日開館式を挙行 後藤文夫が日本青年館理事長に就任
４月15日	『日本青年新聞』創刊
昭和８年７月23日	山中湖畔の日本青年館分館「清渓寮」開館式
昭和９年11月15日	田沢義鋪が日本青年館理事長に就任
昭和11年４月28日 ５月15日	香坂昌康が日本青年館理事長に就任 千葉県香取郡の日本青年館分館、農村研修所入所式
昭和14年４月１日 ４月18日	大日本連合青年団を大日本青年団と改称 有馬良橘が日本青年館理事長に就任
昭和16年１月16日 ２月16日	青少年団体の一元的統合を図った大日本青少年団結団式、大日本青年団は解散 朝比奈策太郎が日本青年館理事長に就任
昭和17年８月25日	『大日本青年団史』発行
昭和20年９月１日 ９月14日 ９月15日	雑誌『青年』復刊 日本青年館本館建物を連合軍に接収される、事務所を浴恩館に移転 河原春作が日本青年館理事長に就任
昭和21年10月10日	日本青年館分館「鼓峯寮」を伊勢市に設立
昭和23年2月14~16日 ２月26日	第１回日本青年団体連絡協議会開催 佐佐弘雄が日本青年館理事長に就任
昭和24年２月22日	鈴木文史朗が日本青年館理事長に就任
昭和26年５月４日 ５月 ６月17日 ９月10日	日本青年団協議会設立記念式典 日本青年館の青年団運動に関する事業を漸次日本青年団協議会に委譲 一万田尚登が日本青年館理事長に就任 日本青年館及び日本青年団協議会で「産業開発青年運動中央委員会」発足

年　月　日	事　　項
昭和27年11月4～7日	サンフランシスコ講和条約を記念し、第１回全国青年大会を開催
昭和28年２月14日	日本青年館本館接収解除、絵画館より日本青年館に事務所を移転
昭和30年2月18～21日	日青協主催、第１回全国青年問題研究大会を日本青年館で開催
昭和31年２月24日	後藤文夫が日本青年館理事長に就任（二度目）
昭和44年11月12日	小尾乕雄が日本青年館理事長に就任
昭和45年３月25日	『大日本青少年団史』の発行
昭和46年３月25日	『日本青年団協議会二十年史』発行
昭和47年11月8～10日	第１回日本の秋祭り（日本青年館・日青協共催）絵画館前で開催。全国青年大会が文部省の主催をはなれ、青年館・日青協・東京都教育委員会の共催事業となる
昭和48年１月10日	新館建設のため浴恩館の土地、建物を小金井市に売却
昭和49年２月１日	富士青少年センター清渓寮竣工
昭和52年２月７日	初代青年館解体工事始まる
昭和54年１月31日 11月１日	日本青年館新館竣工　２月１日を開館記念日とする 結婚相談所を開設
昭和56年４月12日	青年団新館募金５億円突破
昭和61年11月21日	第１回国民文化祭「民俗芸能の夕べ」（日本青年館・文化庁・東京都共催）開催
平成元年２月１日	日本青年館新館建設10周年記念式典、『グラフ 日本青年館と青年団』刊行
平成３年９月２日	日本青年館創設70周年記念式典開催、『日本青年館70年史』（資料集・小史）刊行

年　月　日	事　　項
平成５年５月20日	山中湖分館に新館イーズ（国際交流研修棟）竣工
平成７年1月7・8日 ５月23日 11月	第１回全国高等学校選抜オーケストラフェスタ開催。 竹下登が第15代理事長に就任 「全国青年文化祭」明治公園（～平成10年まで開催）
平成11年５月17日	新館建設20周年記念式典開催
平成12年６月19日	竹下登理事長逝去。大西末廣理事長代行選出
平成13年５月15日 ９月５日 11月９日	竹下登理事長逝去にともない小里貞利が第16代理事長に就任 日青協結成50周年記念式典開催、『地域青年運動50年史』刊行 第50回全国青年大会記念式典開催
平成15年２月	本館８階改修竣工
平成22年１月	６～７階トイレバス設置リニューアル化（～３月）
平成23年３月11日	２時46分東日本大震災（震度９）青年館は５階、６階被害過去最大
平成23年11月11日	日青協結成60周年、（財）日本青年館設立90周年記念式典開催
平成23年11月30日	結婚相談所閉所
平成24年２月22日 ８月６日 ９月28日	（財）田澤義鋪記念会との合併について文科大臣認可 全日本社会教育連合会との合併、文科省承認。中青連の解散（財産寄付先を日本青年館）が文科省承認 臨時理事会開催、国立競技場改築にともない青年館は移転協力することを確認
平成25年９月	2020年オリンピック・パラリンピック開催地、東京に決定！東京開催は56年ぶり
平成26年４月１日	一般財団法人として認可

日本青年館の歴史的役割と未来

佐賀大学教授　上野　景三

日本青年館の歴史を振り返ってみたとき、青年教育のみならず、日本の社会教育の歴史を語る上でも大きな影響を与えてきたことがわかる。それだけ日本青年館の存在感は、大きかったと言えよう。青年教育の殿堂であったことは、日本の社会教育のナショナル・センターでもあった。ここでは、日本の青年教育の歴史をひもときながら、日本青年館の歴史的役割を確かめ、青年教育と青年施設の未来を考えてみたい。

1 小学校教育の補完としての青年教育

まず、日本の青年教育と施設の成り立ちをみておきたい。日本の近代的な教育は、1872（明治５）年の学制に始まる。これまでになかった制度が始まることから、未就学の子どもも少なくなく、その手立てが講じられていた。

学制は、小学の部で「夜学校」の設置を認めていた。「夜学校」は、日中に小学校に通うことのできない子どもたちのために、小学校教員が夜間に教えるというものである。「夜学校」は、地域によってさまざまな形態で展開されていたようである。

例えば青年宿を青年教館にした例である。神奈川県足柄下郡吉浜村では、「明治29年、鍛冶屋部落では区費より年々二十四円の補助金を支出して、常時空家となっていた一軒の民家を借り受けて夜学会場に充て、ここに五十四名の部落青年を合宿せしめた。教科は修身、国語、漢文、算術、農業等の初歩で、先生は御寺（瑞巌寺）の住職と小学校の校長とが担当して、頗る厳正な教育に努め、漸次積弊を一掃するに至った」と記録されている（大日本連合青年団編『青年宿』1931）。鍛冶屋部落では、宿の青年に山林経営を委託し、山林伐採利益金で取得した500円を基礎に区費を加え1899（明治32）年に夜学会場「青年教館」を新築した。鍛冶屋部落の青年専用の教育施設である。

また1911（明治44）年６月26日の朝日新聞には、「教員住宅落成」の見出しで、次のような記事が掲載されている。

栃木県河内郡本郷村にては総工費一千六百八十七円十五銭の内県より五百六円の補助を受けて村立尋常高等小学校教員住宅二棟建築中なりしが全く落成し、上都賀郡加蘇村にても四百廿円の工費中百廿六円の補助を得て同様一棟の建築中なりしが是亦竣工し、河内郡豊郷村にても尋常高等小学校教員住宅に兼ぬるに青年会館に充用するの目的を以て一千百二円六銭の工費中に百二十円四十銭の補助を得て一棟の建築中なりしが是亦完成を告げたり。

小学校教育の補完としての青年教育は、小学校教員の「部落分住」が進められ教員住宅を建設する際に「青年会館」の機能を併わせもって建設されていたことがわかる。これまでの青年宿の機能とポスト小学校教育の機能を兼ね備えて青年会館が設置され始めたわけである。

2 青年教育の独自の方法の開発

日本の青年団の父と呼ばれた田澤義鋪が静岡県蓮永寺で修養団の天幕講習を開催したのは、1914（大正３）年のことであった。つまり、小学校教育の就学率があがり、各地域でポスト小学校教育の体制が整備され始められると、次には、これまでになかった青年教育の方法が模索・開発され始めるのである。その代表例がこの天幕講習会であった。

田澤ばかりでなく、この時期、通俗教育講師を名乗っていた石田伝吉は、幻燈機を背負って全国

大正３年　蓮永寺での講習会参加者たち

の青年団を講演して回っていた。この活動は1916（大正５）年に『全国行脚優良青年団の美績』としてまとめられている。1919（大正８）年、修養団にいた篠原無然（禄次）は、岐阜県上宝村に「やはらぎの園」という青年会館を建設し、村から出稼ぎにでている紡績女工たちを相手に講義をしていた。同じように、宮沢賢治は、1926（大正15）年に岩手県花巻に「羅須地人協会」を設置し、農学校の生徒たちに教育を行っていた。この他、中央報徳会や東京青年会館、修養団、希望社等の社会教育団体が次々と叢生し、社会教育活動が拡がっていく。

明治期の青年教育は、小学校教育の補完という性格を強くもち、小学校教員があたっていたのだが、大正期に入ると、小学校とは分離して通俗教育、社会教育の専門の領域や指導者が生まれてくるようになる。それが青年団指導と呼ばれ、各県の教育会にも専任の担当者がおかれ始めるのである。このような時代的な状況の中で、日本青年館は登場してくるのである。

3 日本青年館の成立

日本青年館の成立に関する資料については、『日本青年館70年史』（1991）に詳しくまとめられている。そこで『70年史』や『大日本青年団史』では触れられていない点について、東京朝日新聞の記事からいくつか紹介しておこう。

1921（大正10）年から日本青年館の設立時期にかけての記事の見出しをリストアップしてみよう。

1921年８月26日「『青年日』提議（十月廿三日）床次内相談」
９月３日「青年会館」
９月20日「青年会館寄付の強要を断然拒絶す　静岡県下最も強硬」
９月23日「青年会館」
９月29日「青年館設立弁」
1922年５月27日「青年団問題　文相に詰問　如才ない対応振り　田子局長が苦しい答弁」
７月14日「昨日の内務予算会議　地方、神社、社会三局の査定」
９月11日「紛擾した青年会館も設計ができた内務省の『詰込主義』から宿舎の方が行悩み」
1923年２月７日「日本青年会館の内紛爆発す　近衛公が突然座間氏等十数名を馘首す」
７月26日「記念青年館の建設不賛成　趣旨不徹底から各地青年団中に反対気勢揚る」
11月26日「お役人も反省して　大日本連合青年団組織を全国に急がせる」
1924年６月２日「麦飯で集まった全国七百の青年代表　近衛連隊を宿屋にワイワイ」
11月２日「嘹喨たる行進曲に壮烈な入場式　北海道から沖縄まで全国青年妙技を揮う」
1925年６月10日「御影石のはだ美しく　神宮外苑の三偉観　復興市内の新名所」
10月７日「日本青年館の開館式に紹介される郷土芸術　全国から集まる青年団の代表　五百名が手に手に持ち寄るお国自慢の数々」
10月28日「演壇の農村青年代表　文部大臣を攻撃す　口角あわを飛ばすが実はみな空腹の弁士諸君　日本青年館二日目の弁論会」
10月29日「神宮競技の参加の選手六千名を招いて　本社主催活動写真会」
10月30日「競技の疲も忘れて　本社活動写真」
10月31日「郷土舞踊」
1927年３月27日「にらみ合ひの青年団合併　内務省系と文部省系とが福岡の大会を機に」

この時期の新聞報道をみると、興味深いことがわかる。一つは、日本青年館の設立が難産であったことである。主な論点は財源の問題であり、全国の青年団から寄付金を募るものの、反対も多かったという記事である。寄付金問題の紛糾を背景にしながら、床次内相の「青年日提議」は、全国青年団の「青年日」を定めて、所在の神社、学校、公会堂に集まって「令旨」を奉読後、講演会や運動会を開催し、日本青年館建設を機に全国青年団の連合統一に

むけた大運動を起こすことを期待したものである。「青年日」は、1930年に文部次官通牒「青年記念日ニ関スル件」によって定められた。

二つには、内務省と文部省の対立が垣間見えることである。読売新聞（1926年９月10日付け）の記事には、「日本青年館の国庫補助金で、また文部省と内務省がイガミ合ひ」とストレートに記載されており、「年中行事の一つ」とまで書かれている。この背景には、内務省系の日本青年館に対して、地方で青年団を指導してきた文部省とが、青年団の全国組織化をめぐって主導権争いをしていたことが推察される。

三つには、青年館の開館式は、とても歓迎されて迎えたことがわかる。寄付金問題も官僚の対立もまるでなかったかのように、歓迎ムードであったことである。郷土芸能、神宮競技大会、それにあわせての各種イベントの開催は、関東大震災後の帝都復興を示す象徴であったかのようである。

日本青年館設立時の動向は、今の時期と重なって考えても興味深い点である。しかし、ここで特に注目したいのは、1924年６月２日の「麦飯で集まった全国七百の青年代表　近衛連隊を宿屋にワイワイ」の記事である。全国から集まってきた七百名の青年は、日本青年館の６月３日の定礎式に集まった青年たちである。全国各地から洋服やセルヤ絹物の和服を着て、トランク、鞄、風呂敷を抱えて近衛連隊の兵舎に集まり、そこを宿屋にして、麦飯をぱくついてお国訛りでしゃべり、蜂の巣のような騒ぎであったと記されている。日程をみると、初日は集合し夕食後に後藤文夫の講演、二日目は明治神宮参拝、摂政宮殿下に代表者名簿と祝詞を奉呈、三日目は日本青年館定礎式、午後憲法記念館で祝宴、四日目は理化学研究所、栄養研究所、東京日日報知本社の三新聞社の見学、五日目は横須賀で軍艦操縦の見学、六日目は軍艦長門、山城、迅鯨に乗船し鳥羽に向かい、伊勢神宮に参拝して解散、となっている。

近衛連隊の兵舎を宿屋にして全国青年の交流が弾み、さらに東京での視察・見学である。今で言う学校の修学旅行のようなものである。地方に生きる青年たちが、生涯のうちに一度は東京にでて、中央官僚の講演を直接聞き、明治神宮に参拝し、先端科学技術に触れ、日本の国力を肌で感じる、といった新しい教育のスタイルが生み出されようとしていたわけである。そのために日本青年館は、ホテル部門を作ったといってもよい。

4 全国の青年会館の設立の契機 ―センター・オブ・センター―

日本青年館建設後、全国各地で青年会館の建設の機運が高まってきた。それは青年の修養殿堂の建設と表現される。地方に住む青年たちが、生涯に一度、東京へと出かけるために日本青年館が設立されたように、道府県の青年たちに対して、県都へお出かけする、また一人一研究の成果を県民に発表していく、そういった機会をつくることが求められるようになったわけである。

大日本連合青年団の第七回大会の記録をみると、日本青年館建設後の1931（昭和６）年４月、「各府県ニ修養殿堂タル青年会館建設促進ノ件」（愛知県連合青年団提出）が提案されている。提案理由は大まかに言えば、近時、社会教育が拡充され、青年訓練所等が設置されてきたといっても、学校施設の充実には比べ物にならない。府県に青年館を一つづつ建設し、青年修養の中軸とする会館を建設して日本青年館を中心とした全国青年館網を張って相互連携して巡回修養の事業を講じていこうという内容である。問題は経費であるが、愛知県では中学校生徒一人に対して210円、女学校が70円、実業学校が300円という莫大な費用に対して、青年団員が通う青年訓練所の費用は僅か11円であると述べている。中等学校を一つ建てる積りで、各府県に青年会館を建ててほしいという主張になっている。

その結果、各府県で青年会館の建設が進められていく。そればかりでなく、これまでの青年宿や倶楽部、会館などを含めて、全国で郡部18,920、市部で530、の青年施設の存在が確認されている（大日本青年団『青年会館・宿泊施設調査』1939）。日本青年館は、これら地域ごとの青年施設の象徴であり、またセンター・オブ・センターとしての役割を期待されていたといえよう。

これらの施設は、大型の施設は、そのまま府県の青年会館として引き継がれ、小さな会館・倶楽部は公民館に引き継がれたりするケースが多かったようである。戦後の公民館づくり運動においても、青年会館・倶楽部の建設と合築するケースもあり、青年たちが労力奉仕をしながら建設した場合も少なくない。そういったエネルギーを地域に蓄積する役割も担っていたといえよう。

5 日本青年館と指導者養成

日本青年館の役割の中で、見過ごすことのできない役割の一つが、社会教育、青年教育の指導者養成である。具体的には日本青年館分館浴恩館の役割である。1930年に浴恩館に青年団指導者養成所が設置（のちに青年団講習所に改称）され、第一回の入所生46名が２月から３月の51日間の講習を受けている。職業は農業、教員が多く、学歴も中学卒、農学校卒など、さまざまである。この講習は、地方の青年団を指導する立場の者を養成していることから、今でいうならば大学の行う社会教育主事講習に該当するようなものである。

昭和７年　第４回青年団講習所開所式

この他、社会教育研究生の養成も行っている。これは青年団指導者ではなく、大学卒業生の中から選抜し、一年間実務を経験させ、必要な科目の講習を受けさせている。今でいえば、国立社会教育実践研究センターの研究員のようなものである。青年団幹部の練成も行っている。青年団の団長、副団長、中堅幹部を対象としているが、これは都道府県の教育委員会や国立青年の家が行っていたリーダー養成講座のようなものである。

これらの指導者養成のスタイルをみると、日本青年館を拠点として日本のあらゆるレベルの社会教育指導者養成を行っていたことがわかる。たしかに指導者養成や社会教育主事養成は、日本青年館ばかりで行っていたわけではない。だが、研究、監督、実践の各レベルにおいて養成のしくみを作り、また中央ばかりでなく、日本の地方の隅々にまで青年団幹部の養成のしくみを作ったという点で、日本青年館の果たした役割は大きいといわざるをえない。

6 日本青年館の未来

未来を語るときには、これまでの歩みをたどることが必要である。現在、社会教育や青年教育の未来を見通すことは、なかなか難しい時代である。学校教育が充足し、青年学級振興法が廃止され、青年のための施策は、文部科学省ではなく、内閣府に収斂されてしまっているかのようにみえる。こういう時代だからこそ、自分たちの歴史を大切にし、何をなしえてきたのかを確かめることから出発しなければならないのではないかと思う。

というのは、直面する問題や課題は、新しいようにみえるが、実は先人たちも同じような問題にぶつかってきたのではないかと思うからだ。日本青年館設立時の新聞報道は、そう思わせてくれる。財源の問題、省庁間の対立などがいつの時代にもあり、しかし、郷土舞踊、スポーツ競技、指導者養成など、青年たちの力で時代の最先端を開拓してきた歴史をもっている。今は、何が最先端なのかが見えにくくなっているだけではないのだろうか。

見えにくくなっている理由の一つは、あらゆる分野で、領域の線引きの見直しが始まっているからだ。これまで社会教育や青年教育の領域だと思っていたものが、そうではなくなってきたということだ。市町村合併や公務労働の民営化についても、線の引きなおしだといえるのではないだろうか。一方では、私たちの知らないところで新しい動きが始まっているのかもしれない。

問題は、誰が線を引きなおすのか、何のために引きなおすのかという点である。線を引くのは、中央官僚や首長だけではあるまい。そこに住む青年たちが、線引きの主人公として登場してくることが待たれているのだ。歴史を振り返ってみれば、日本青年館は、周辺に追いやられていく青年たちを、主人公に後押しする役割をもっていた。その役割を、今の時代にあって、また今回の建替えによって、どのように蘇らせていくことができるのだろうか。

新たな拠点めざして

――三代目の日本青年館にむけた経過と構想

2012（平成24）年、日本青年館にとって大きな課題となる、移転・建設への対応が動き始めた。スポーツ振興、オリンピック等の誘致を目指し、隣接する国立競技場の改築が「国家プロジェクト」として計画され、それに伴い日本青年館の移転が（独）日本スポーツ振興センターより要請されたのだ。青年館では、５月の理事会で国立競技場改築対策検討委員会（榎信晴委員長）を設置、小里貞利理事長の指揮のもと、その対応について精力的な協議が始まった。臨時の理事会・評議員会を経て、日本青年館はこれまで果たしてきた歴史や役割をふまえ、現在の規模、役割、機能を維持することを条件に、この国家プロジェクトに協力して移転に応ずる姿勢を確認した。

平成25年度は新たに「日本青年館移転・建設委員会」に拡充し、日本スポーツ振興センター及び文部科学省との間で移転補償の問題を協議することと、移転予定地における日本青年館の青写真を検討する作業という両面から進めた。

前年からの議論をふまえ、委員会においても日本スポーツ振興センターとの協議を重ね、理事会・評議員会でも慎重なる審議を経た。その結果、現在の規模・役割・機能・名称を継承し、日本スポーツ振興センター及び文部科学省による財源措置の実現を図ることとあわせて、予定地の西テニス場に移転し、日本スポーツ振興センターとの区分所有による新たな日本青年館を建設することを確認したのである。

2014（平成26）年４月、新しい日本青年館の設計者が公募され、株式会社久米設計に決まった。設計者公募に当たっての考え方には、新しい日本青年館と日本スポーツ振興センターの建物は、「スポーツの果たす役割を踏まえ、スポーツの振興・推進の諸活動が活発に展開され、新たなスポーツ文化を確立していくための拠点として、また、日本青年館の歴史的背景、設立の趣旨、果たしてきた役割等を尊重し、青年館の持つ機能と共同・連携し、明治神宮外苑の成り立ちにも適う新競技場と一体の国家プロジェクトとして実現を図るものである」、とその趣旨が謳われている。

現段階では、地上15階・地下２階建ての新たな日本青年館とし、そのうち約３フロアー分が日本スポーツ振興センターの所有となる区分所有による建築を想定している。

しかし、設計途中で新たな課題も出ている。この間、建設業界では東北の震災復興への対応等で、建設費の高騰が際だっており、当初の想定建設費をかなり上回る可能性もある。小里理事長をはじめ移転・建設委員会は、日本青年館の財政的負担をできるだけ軽減してスムーズな移転が実現できるよう関係機関に働きかけ、文部科学省・日本スポーツ振興センターも建設実現に向けた最大限の支援を検討している。

今の工程で行けば、昭和54年に建てられた二代目日本青年館も、平成27年度には解体され、予定地である神宮球場の真向かいのテニス場跡に新たな日本青年館の建設が始まる。東京オリンピック・パラリンピック開催に向けて大きく変容する神宮外苑。新しい国立競技場に隣接する第三代目の日本青年館は、2017（平成29）年には完成の予定である。

先輩方の大変なご努力と関係機関の多大なご支援によって建設され、35年にわたり全国の青年団活動をはじめとする青少年教育・活動、社会教育の拠点となった現青年館に心から感謝しながら、その役割を新たな日本青年館に引き継いでいきたい。

青年館屋上から見た移転先のテニスコート

終戦直後、左に近衛連隊兵舎跡がのこる。（上記写真の左道路からみた青年館）

一般財団法人 日本青年館役員・職員名簿

歴代理事長

近衛文麿　一木喜徳郎　井上準之助　後藤文夫　田澤義鋪
香坂昌康　有馬良橘　朝比奈策太郎　河原春作　佐佐弘雄
鈴木文史朗　一万田尚登　後藤文夫　小尾庸雄　竹下登

理事長

小里貞利

常務理事

山本信也

理事

榎信晴　大西倉雄　岡泰一　加藤義弘　佐々木計三
松下育郎　立道斉　照屋仁士

監事

瀬田川栄一　氏家寿士　海東英和

評議員

青木幹雄　安谷屋幸勇　板本登　岩永峯一　岡下進一
男成洋三　小野寺喜一郎　三瓶千香子　嶋田清隆　中川晴夫
西井勇　西沖和己　東和文　保坂武　星野雅春
宮本光明　矢口悦子　山崎昌子　横山陽一　吉田恵三

職員

総務部

部長 佛木　完　(総務課)課長 江口　芳人　主任 小森真知子
(移転・建設準備室)係 松尾　直泰　(会計課)課長補佐 杉浦　協子
(管理課)課長 鈴木　善彦　係 岩﨑　剛　臨時職員 和田　照智

業務部

部長 真田　秀実　(ホテル)支配人 吉田　豊　副支配人 池田　健二　中山　篤
主任 河野ゆかり　小川里津子　高橋　大介　熊井　英人　係 渡辺　輝明
営業課長 澁谷　隆　嘱託職員 長尾清一郎　町田　敏
(分館山中湖畔荘清渓)支配人 鈴木　茂　副支配人 後藤　雄次　祐成　一男
主任 木村　安孝　相澤ちえみ

公益事業部

事業部長 佛木　完　(事業課)課長 坂野　直子　課長補佐 永田晋一郎
(青年問題研究所・資料センター)嘱託職員 掛谷　舜治　(社会教育編集部)編集長 嘱託職員 近藤　真司
嘱託職員 香田　明子
青年活動課 主幹 田中　潮　主任 鳥澤　文彦　棚田　一論　係 早川　麻登　鎌田　菜穂

日本青年団協議会役員一覧

会　　長	立道　斉								
副 会 長	澤田　康文	廣瀬　純子	照屋　仁士	戸嶋　幸司					
事務局長	田中　潮								
常任理事	福永　晃仁	佐久間祥平	山田絵美子	千葉　浩行	石井　昌志	砂口　真			
監　　事	高山　盛光	久保田秀樹	相馬　隆史						

全国道府県青年団(会)名一覧

北海道青年団体協議会
青森県連合青年団
岩手県青年団体協議会
宮城県青年団連絡協議会
秋田県連合青年会
山形県連合青年団
福島県連合青年会
茨城県青年団協議会
栃木県連合青年団
群馬県青年団連合会
埼玉県青年団体協議会
千葉県青年団協議会
神奈川県青年団協議会
山梨県青年団協議会
新潟県連合青年団
富山県青年機構
石川県青年団協議会
福井県連合青年団
長野県連合青年団
岐阜県青年団協議会
静岡県青年団連絡協議会
愛知県青年団協議会
三重県青年団体連絡協議会
滋賀県青年団体連合会
京都府連合青年団
大阪府青年団協議会
奈良県青年団協議会
和歌山県青年団協議会
鳥取県連合青年団
島根県連合青年団
岡山県青年団協議会
広島県青年連合会
山口県連合青年団
徳島県青年連合会
香川県連合青年会
愛媛県青年団連合会
高知県青年団協議会
福岡県青年団協議会
佐賀県連合青年団
長崎県青年団連合会
熊本県青年団協議会
大分県連合青年団
宮崎県青年団協議会
鹿児島県青年団協議会
沖縄県青年団協議会

日本青年館 青年団 Information

(一財)日本青年館、そして日本青年団協議会で取り組まれた平成26年度上期のバラエティーに富んだ活動を紹介します。

みごとな東西音楽の融合 ー山中湖国際音楽祭2014ー

今年で７回目を数えた、「山中湖国際音楽祭2014」は、８月29日（金）～31日（日）、山中湖畔荘「清渓」で開催。３日間で４コンサートを行った。ピアノデュオ・クトロヴァッツ兄弟を中心に、その仲間の演奏家と日本の邦楽演奏家の８人による演奏で、それぞれの個性や楽器の持ち味を遺憾なく表現し、喝采の拍手が贈られた。

ピアノデュオ・クトロヴァッツの２台ピアノの演奏は、その超絶技巧と深い音楽性が圧巻であった。また、ピアノ、ヴァイオリン、ヴィオラ、チェロという西洋の弦楽器と、日本の尺八、箏、津軽三味線とのコラボレーションは、この山中湖国際音楽祭ならではのもので、昨年に引き続き観客からは絶賛の声が高かった。日本にいながらも邦楽や日本の楽器演奏を間近で聴く機会はほとんどないが、その新鮮な音色、西洋楽器とのみごとな組み合せに驚き、感動した方々も多かった。

音楽監督のヨハネス・クトロヴァッツ氏は、自らが主催する2015年５月開催のオーストリア・シュラインング国際音楽祭においても、同じ日本人アーティストとの演奏を披露する予定で、国際的にも益々注目されそうだ。同時に、このような組み合わせが誕生したことは、日本青年館の文化事業にとっても貴重な財産といえよう。

気仙沼の子どもたちに 届けたPDKコンサート

ピアノデュオ・クトロヴァッツ（PDK）兄弟は、音楽祭の後９月２日には、震災の傷跡が依然として残る宮城県気仙沼市大谷小学校・中学校の生徒たちへのコンサート（主催：大谷子ども未来基金、一般財団法人日本青年館）で演奏。挨拶に立った生徒からは「始まったとたんに、今まで聴いたことのない迫力、引き込まれるような世界に鳥肌がたちました。私たちのために気仙沼に来てすばらしい演奏をきかせてくれてありがとうございました」と述べた。

クトロヴァッツ兄弟は、11月に再度来日し、山梨県甲斐市、東京都町田市、香川県善通寺市、高知県椿原町でコンサートを開催する。中でも、11月26日（水）、日本青年館大ホールでの、日本青年館ファイナルイベント第二弾「ありがとう　そして　さよなら日本青年館」コンサートは、クトロヴァッツ兄弟にとっても青年館最後の演奏となる。多くの方々にご来場いただき、渾身の演奏をお楽しみいただきたい。

活動家養成事業「かつけん」

日本青年団協議会は、上記「かつけん」を６月14～15日にかけて開催。株式会社 Woomax の松本昌子氏を講師に招き、「聴く力」、「伝える力」についてワークショップ形式で実施したほか、元日青協会長加藤義弘先輩を講師に招き、「学ぶ力」「つなぐ力」についてお話いただいた。その後、加盟状況マップを作成し、今年度のオルグ目標などについて話し合った。この事業で得られた手法をもとに鳥取県や岡山県では加盟団体や教育委員会への訪問活動の取り組みを踏まえ、準備を進めている。

北方・平和活動

６月から９月にかけて、北方領土や平和活動、そして、国際といったテーマで各事業が日本青年館との共催で行われた。

北方領土返還要求運動としては、６月26日から30日にかけて、「平成26年度北方四島交流訪問事業」（通称：ビザなし交流）が行われ、日青協から戸嶋幸司副会長と鳥澤文彦部長代理および香川県団から佐伯祐輔副会長が参加し、国後島と択捉島を訪問した。また、７月19日から21日にかけて、北海道根室市で第45回北方領土復帰促進婦人・青年交流集会（全国地域婦人団体連絡協議会共催）が行われた。いずれの事業も実際に島へ足を運んだり元島民の証言を聞いたりすることでしか得られない学びを得ることができた。

また、８月９日から10日にかけて長崎県長崎市で平和集会を行った。長崎市による平和祈念式典への参加や被爆体験の聞き取り、リレートークやフィールドワークを通じて、核兵器や原発問題などについて学びを深められた。また、今集会には地元の高校生が多数合流したほか、他団体からも参加があるなど、年齢や団体の枠を超えて開催できたことにも特徴があった。

国　際　活　動

国際活動では二つの事業を行った。一つは、８月22日から26日にかけて実施した、第23次植林訪中団である。今年度は内蒙古自治区ダラトキに派遣し、沙漠に木を植えただけでなく、中国や韓国の青年たちとも環境問題について討論するなど、草の根交流の可能性が広がる機会となった。また、９月18日から21日にかけては韓国青少年団体協議会の代表２名を受け入れた。東京での青年団との懇談会や青年教育施設表敬訪問のほか、静岡県団の協力のもと地方プログラムを行った。

青年大会の拡充をねらいに今年度は全国８ブロックから１県ずつモデル地域を設定し、道府県大会の拡充に取り組んでいる。上半期の取り組みをふまえ、下半期に向けてさらなる動きが期待される。

谷貝さん・那須野さんの逝去を悼む

東京農工大学名誉教授　千野　陽一

2013年、14年と相次いで、日青協の発展に大きな力を与えてくれてきた助言者の二人が他界された。谷貝忍さん（74歳）と那須野隆一さん（80歳）だ。痛恨の極みである。

谷貝さん（元日本大学教授）は、1963年、大学卒業と同時に故郷に近い茨城県水海道市（現常総市）に社会教育専門職員として就職する。高度経済成長下の農村破壊がはっきりし、地域青年団もしだいに活力を喪失してゆく時期だった。そうした中で、詩人といってもよい谷貝さんは、近くの農村女性の「こだま」という詩とであう。この詩こそ、青年団活動の仲間の減少をくいとめ、停滞を乗りきってゆく谷貝さんのすぐれたエネルギーの一つになり、そのことがまた、谷貝さんを日青協と結び付けていく。

「オーイ」と呼ぶから　「オーイ」とかえってくる　なんのふしぎもない　「オーイ」と呼ばないから　こだまはかえってこないのだ

また、団活動やグループ活動の原則を「お互いを大事にしあう」「みんなで決め、仕事をわけあう」「目標はわかりやすくし、実行でき、やりぬけるものを」「考え方の違いを認めあう」などとする谷貝さんの思いも、地域の青年や女性との関わり合いと深く結びついている。そして、谷貝さんの日青協の全国集会での助言は、自らの発言は少なくし、参加者が、その思いを十分にだしあい議論する中で、方向性を掴みあってゆくというものとしてよく知られていたし、そのことが参加者への大きな励ましとなったのである。

那須野さん（日本福祉大学名誉教授）は、高度経済成長期の農村地帯から集団就職という形で名古屋へ転入してきた働く青年を主体とした名古屋サークル連絡協議会（名サ連）とエネルギッシュに関わり、「生活史学習」という手法でその成長を励ました。そのことから日青協とも深い関係をもっていくのである。

とりわけ、1976年に日青協から刊行された那須野さんの『青年団論』は、青年団活動の「第二の高揚期」と重なったこともあり、80年代前半まで版をかさね、広く読まれていく。それは、那須野さんが「であい」「ふれあい」「わかちあい」を青年団の特質ととらえ、学習方法として提唱した「生活史学習」（生いたち・生きざま・生き方学習）が、高度経済成長期に団員減少とゆきづまりに悩んでいた各地の青年団の心を見事に掴んだからである。いうまでもなく、那須野さんが日青協の活動に及ぼした影響は、これだけではない。しかし、とりあえずここでは、『青年団論』に示された那須野さんの青年集団のとらえかたとその発展方向に関する考え方だけにふれておく。

いずれにしても、お二人の日青協との関係には広く深いものがある。しかし、字数制限もあり、この辺で筆をとめておきたい。

あ と が き

若者たちの格差・貧困が最悪な今日、なぜか1960年代の名作ドラマ「若者たち」が装いも新たに帰ってきた。若干ドタバタ気味ではあるが、現代社会の諸矛盾を抱え受け止めながら一生懸命に生きる若者たちの姿を描いてるテレビドラマだ。現代の若者たちはこれをどのように受け止めているのだろうか。

青年団と青年館はここに描かれているような若者たちの本音や弱みを受け止めて、仲間づくりの中で自己成長を支えてきた。歴史の中で忘れたものを呼び起こして考えさせてくれる「新若者たち」とも言える。三代目の青年館竣工に寄せる想いを、人間の根源的な姿をみせるTVドラマ「若者たち」から学び考えさせられた。（編集部）

日本青年館図書・出版物紹介

『山本瀧之助日記』２巻～４巻
昭和56～60年刊　菊判　上製箱入　一冊5,300円
青年団の全国組織化に力をそそいだ山本瀧之助の明治21年から昭和5年までの日記。

『若者仲間の歴史』　多仁照廣
四六判　昭和59年刊　265頁　定価2,100円
昭和11年刊行の「若者制度の研究」に続く、全国の若者組の歴史をまとめた力作。

『(財)日本青年館70年史』（資料編）
平成３年刊　1,371頁　定価20,000円
大正10年に発足、以来日本の青年団・青年活動を支援、青年教育施設の典型として歩んできた歴史的資料を編纂。

『ルポ小説　五月の風に吹かれて　ー宮崎県小林青年団物語ー』
大峰順二著　253頁　定価1,500円
地域の様々な人々の中で自己成長していく青年たちの姿をいきいきと描く書き下ろし。

『グラフ　青年団と青年館のあゆみ』
平成2年刊　56頁　定価1,000円
カラー写真等で綴ったビジュアルな青年団と日本青年館のあゆみを紹介。

雑誌『帝国青年』・『青年』
（大正5年～昭和20年のマイクロフィルム出版）
青年団の機関紙として大正5年に「帝国青年」は創刊。大正11年に日本青年館に移管「青年」となる。敗戦の昭和20年までの約30年間にわたる総頁5万頁の雑誌をマイクロフィルムで出版、社会教育史上でも貴重な資料。
揃い価格1,000,000円

「帝国青年」「青年」解説・総目次・索引
A4判　550頁　定価5,000円

ご注文はコチラまで
送料は実費を頂戴します

日本青年館　図書出版係り宛
〒160-0013　新宿区霞ヶ丘町７－１
Fax 03-3475-6605
E-mail info@nippon-seinenkan.or.jp

「社会教育」は820号を迎えました！

1946年７月「教育と社会」創刊から820号を迎え、ご愛読をいただいている読者の皆様をはじめ、原稿を書いていただいた多くの、関係者の方々に感謝申し上げます。

第69巻（通巻第820号）　2014年10月号　2014年10月１日発行
増大号　本体価格1,143円(税別)　郵送料一冊102円

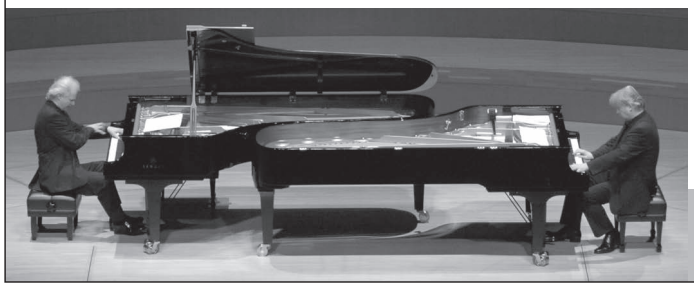
「直接予約購読・前払い」制度

編集部に直接年間予約購読され、料金を前払いしていただくと購読料は送料サービスで年間9,900円と割安になっています。
・普通号（年10冊）743円（税別）・増大号（年２冊）1,143円（税別）

発行　一般財団法人日本青年館「社会教育」編集部
TEL 03(3475)2751（購読申込等）　FAX 03(3475)2569
編集部メール：leh07376@nifty.com　http://www.social-edu.com

日本青年館ファイナルイベント第二弾
ピアノデュオ・クトロヴァッツ記念コンサート
「ありがとう　そして　さよなら　日本青年館」

○開催期日　2014年11月26日(水)　18:30開場　19:00開演
○会　　場:日本青年館大ホール
○主　　催:一般財団法人日本青年館／株式会社ニッセイ
○後　　援:オーストリア大使館／(社)全日本ピアノ指導者協会(ピティナ)
○協　　賛:ヤマハ株式会社
○特別協力:TANAKA KEIKO OFFICE／PDK 200 Club Japan



○出演者
ヨハネス・クトロヴァッツ(Johannes Kutrowatz)
エドワード・クトロヴァッツ(Eduard Kutrowatz)
○チケット
〈一般〉　5,000円
〈学生〉　3,500円
○プログラム
・ドミートリイ・ショスタコーヴィチ　コンチェルティーノ　op.94
・ヨハン・セバスチャン・バッハ　アダージョ、シンフォニア／カンターBWV156
・フランツ・リスト　マゼッパ
・アストル・ピアソラ　エスクアロ、オブリヴィオン
・ジョージ・ガーシュイン　アイ・ゴット・リズム　他

お問い合わせ・お申し込み
一般財団法人日本青年館　公益事業部
TEL 03-3475-2571　Mail music@nippon-seinenkan.or.jp
ピアノデュオ・クトロヴァッツコンサート　検索

日本青年館大ホール
客席／1,360席

大ホール運営
株式会社ニッセイ

〒160-0013 東京都新宿区霞ヶ丘町7番1号 日本青年館内
03-3475-2455 (大ホール受付)
http://www.nippon-seinenkan.or.jp/dai-hall
E-mail:dai-haii@nippon-seinenkan.or.jp